

光琳派畫集



近世瑞澂畫集

三

明治  
39 4 12  
内交





山は其長技、主として陶工に在り、繪畫に至りては、蓋し其陶畫の技術漸く熟し來りて、横溢せる意匠の、繙紙の上に發揮せられたるに過ぎずと云ふも、蓋し過言にあらずるべし、是を以て其繪畫を上光琳の遺蹟に比し、下抱一の作品に較すれば、乾山の手腕頗る遜色あるを免れずと雖も、而も其畫自から一種特得の趣味を存し、斯の流派の一變化を成せるものなるのみならず、何嘗の如きも其門より出で、隨て斯派の傳統上決して等閑視すべからざるの地位を占む、然れども乾山の乾山たる眞價は、繪畫にあらざりて、寧ろ陶器に在り、其陶法は光悦、仁清等に私淑せるのみならず、又支那及び和蘭の所製を研究して之を模し、以て仁清等以外更に獨自一家の格調を出だして、意匠の自在、變化の豊富を示し、文化文政前後に於ける京都窯工の發達に向ひて、一種の典型を示したるは實に偉とすべし。

光琳派の繪畫は由來最も裝飾美の本質に富む、光琳は之を其襟袿に用ひて空前の新典型を大成し、乾山は之を其陶器に應用して一家の風格を創したりとされば、彼等の繪畫は純正繪畫と同一の觀察點に立ちて之を批評すべからず、乾山の作に至りては殊に然りとす、且つ其意匠の斬新奇抜と、筆墨の活脱圓熟とは、固より光琳に如かず、其技巧の精練微妙は遙に抱一に及ばず、而も尙吾人が乾山を推賞して措かざる所以は、其陶畫的裝飾美の趣味に存す人もし、斯派の繪畫を觀て、其工藝上の應用を考へなば、光琳の畫の特に描金に適し、乾山の畫の殊に陶器に宜きことを思はざる者少からん、乾山の畫風は光琳の如く華美富麗ならずして、寧ろ高雅淳樸なれども、而も其高雅淳樸なるどころ、却て陶器の裝飾に最も恰適する所以にして、乾山の畫の眞面目全く茲に存すと謂ふべし、思ふに是れ彼れが恬淡なる稟性と參禪の餘響とに由れる結果ならんか、而して乾山の畫には殊に老年の作多し、或は思ふ、乾山が繙紙の上に其彩筆を驅りたるは、江戸に移りてより後に多かりしに非ざるか、歎名の上に加ふるに華洛京兆、又は平安城遷人等の數字を以てせるもの、秒からざるは、以て之を敘するに足れり、果して然らば其老齡も亦多少其所作の趣味に影響したりと謂ふべきなり。

乾山の畫には光琳風の外、また狩野風を參附せるものあり、而して其走筆瀟灑の頗る老熟せるを見る、本冊收むる所の水墨山水圖の如き、即ち是れなり、又仄に南畫の餘影を發露するもの秒からず、本冊中の八哥鳥圖及び向附の山水水仙二圖の如きを然りとす、當時南宗畫は未だ厓に其萌芽を發したるに過ぎず、然るに乾山が疾く既に斯る影響を受けたるは、一方に於て和蘭の陶器を摸したると同じく、彼れが孜々として技術上幾多の研究を重ねたるを窺ふに

山

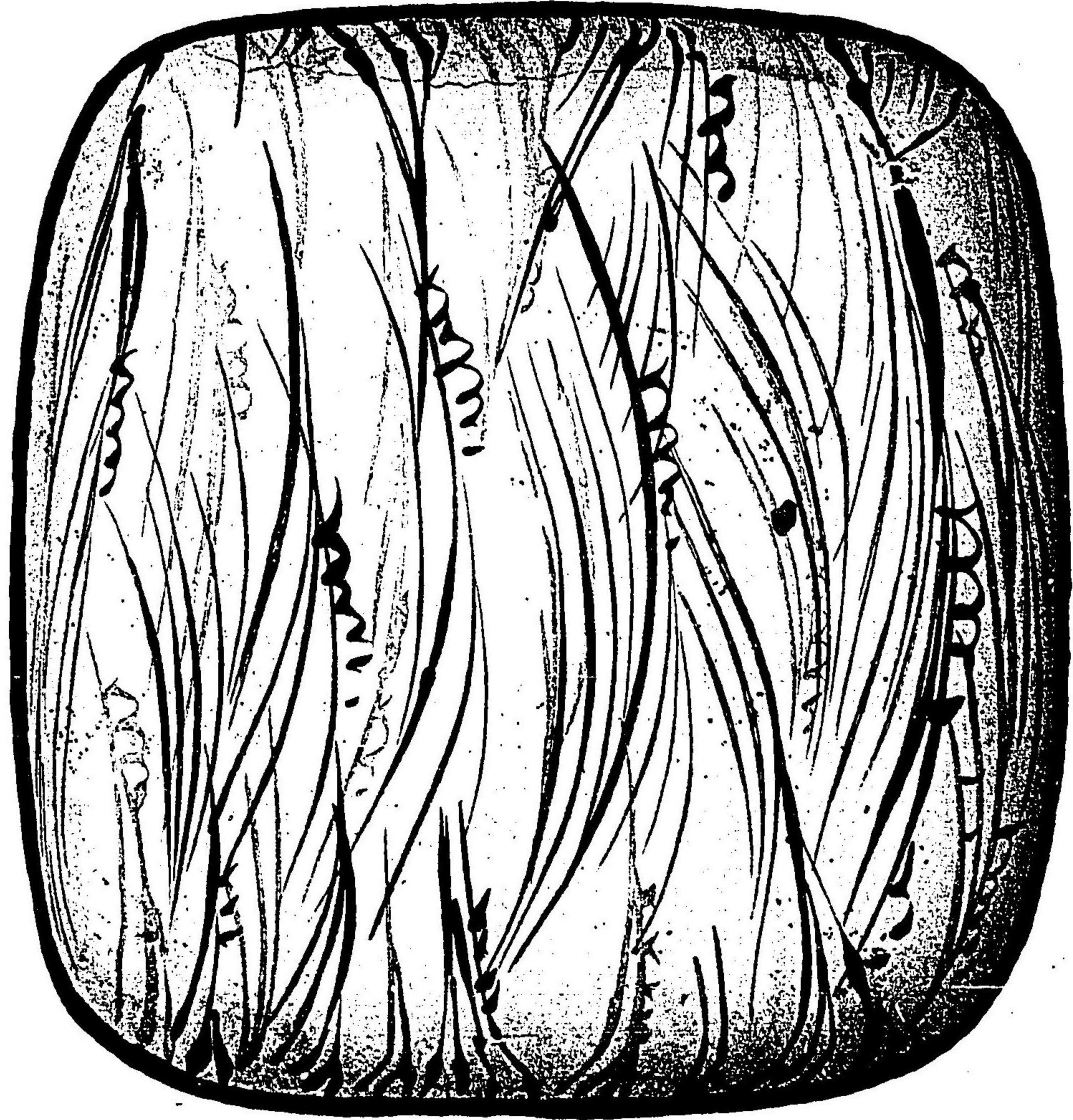
予は... 乾山の詩歌... 和歌は特に推稱するに足るもの妙しと雖も、而も吟詠頗る自在なり、詩に至りては古句を擧りて之を鍊したるもの多きに似たりと雖も、書に依りて之を撰ぶことは同巧なるものあり、殊に神味を帯びたる詩歌最も玩ぶに足る、前に出せる辭世の偶の如きは即ち其一例なり、書は其筆法全く書と同じく簡古なるが、就中假名は殊に巧にして、少しく光悦の餘流を酌みたるが如き感あり、是等の諸技併せ来りて乾山一代の人格が、技藝家として當時に高かりしを想見すべきなり。

予は... 乾山の詩歌... 和歌は特に推稱するに足るもの妙しと雖も、而も吟詠頗る自在なり、詩に至りては古句を擧りて之を鍊したるもの多きに似たりと雖も、書に依りて之を撰ぶことは同巧なるものあり、殊に神味を帯びたる詩歌最も玩ぶに足る、前に出せる辭世の偶の如きは即ち其一例なり、書は其筆法全く書と同じく簡古なるが、就中假名は殊に巧にして、少しく光悦の餘流を酌みたるが如き感あり、是等の諸技併せ来りて乾山一代の人格が、技藝家として當時に高かりしを想見すべきなり。

足れり

乾山の書には題讀の詩歌なきもの殆んど稀れなり、其和歌は特に推稱するに足るもの妙しと雖も、而も吟詠頗る自在なり、詩に至りては古句を擧りて之を鍊したるもの多きに似たりと雖も、書に依りて之を撰ぶことは同巧なるものあり、殊に神味を帯びたる詩歌最も玩ぶに足る、前に出せる辭世の偶の如きは即ち其一例なり、書は其筆法全く書と同じく簡古なるが、就中假名は殊に巧にして、少しく光悦の餘流を酌みたるが如き感あり、是等の諸技併せ来りて乾山一代の人格が、技藝家として當時に高かりしを想見すべきなり。







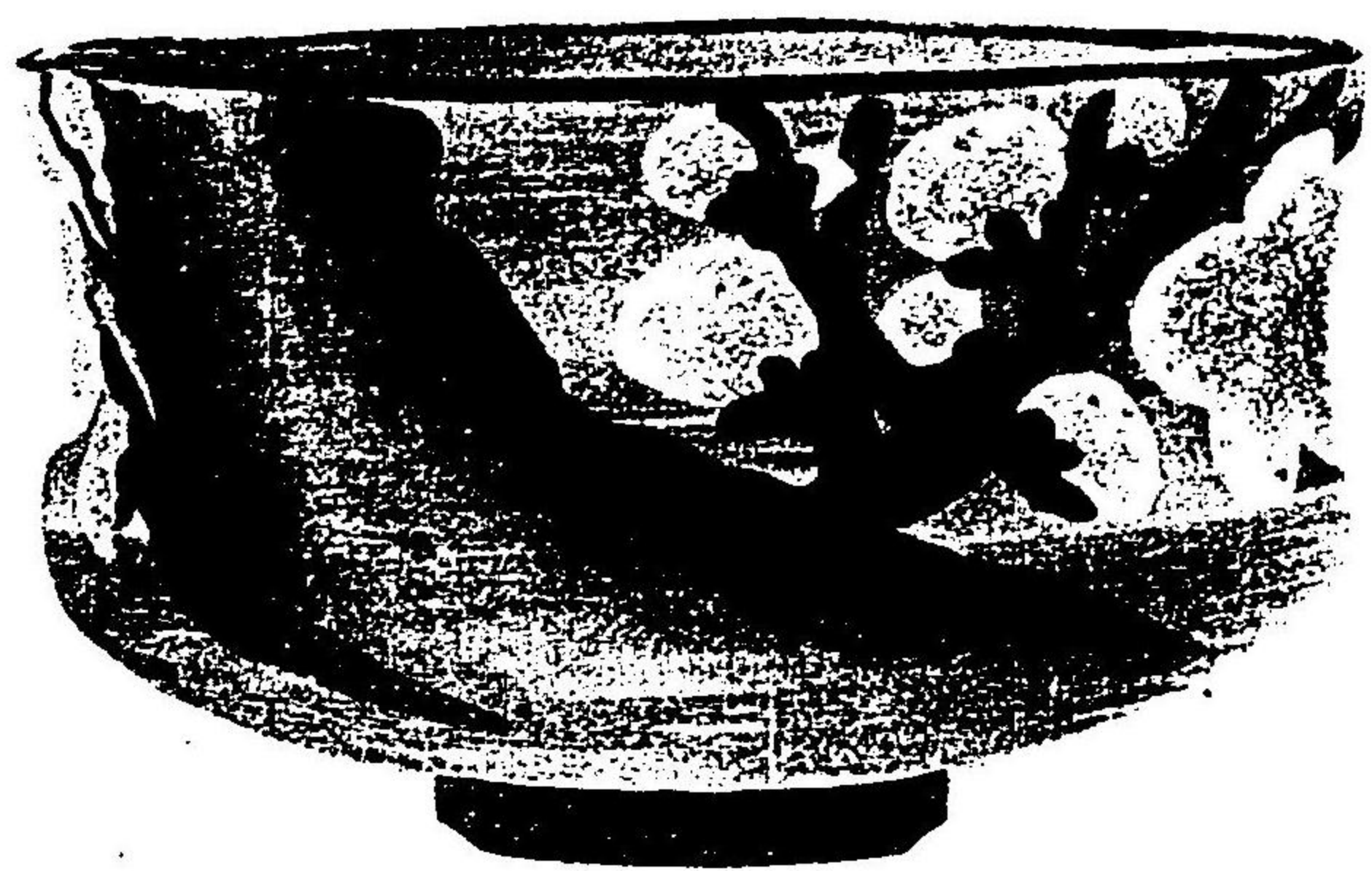


桔梗圖及梅花圖茶碗

(第一圖)口徑三寸三分、高二寸四分  
(第二圖)口徑三寸六分、高二寸五分

東京帝國博物館藏

茲に出す二器の如きは陶工としての乾山の本色を窺ふべき佳品なるべし其形式一は下部張りて口邊微開し、一は上下を開きて中部を窪めたり即ち前者は穩妥を以て勝り、後者は僅に曲折を弄して而も時勢に流れず各、温雅なる特殊の形式を成せるが如き、以て名工の幽微なる曲線の變化に意を用ゐたるの深きを見るべし而して甲圖の老熟輕妙なる桔梗花は、奥雜の趣能く其器形に適應し、乙圖の梅花は布置用筆前者に比して共に稍、模様なれども亦自から其器形に恰好せり彩釉の色調に至りては、乾山平生の趣味に従ひて兩者共に疎淡を以て調和せるを見る、技巧日を送りて巧緻にのみ傾ける現今の工藝界、一面豈簡素質朴なる此種の作品を顧みて、把弄の逸情を鼓吹すること復た不可なりとせんや





桔梗圖菓子器

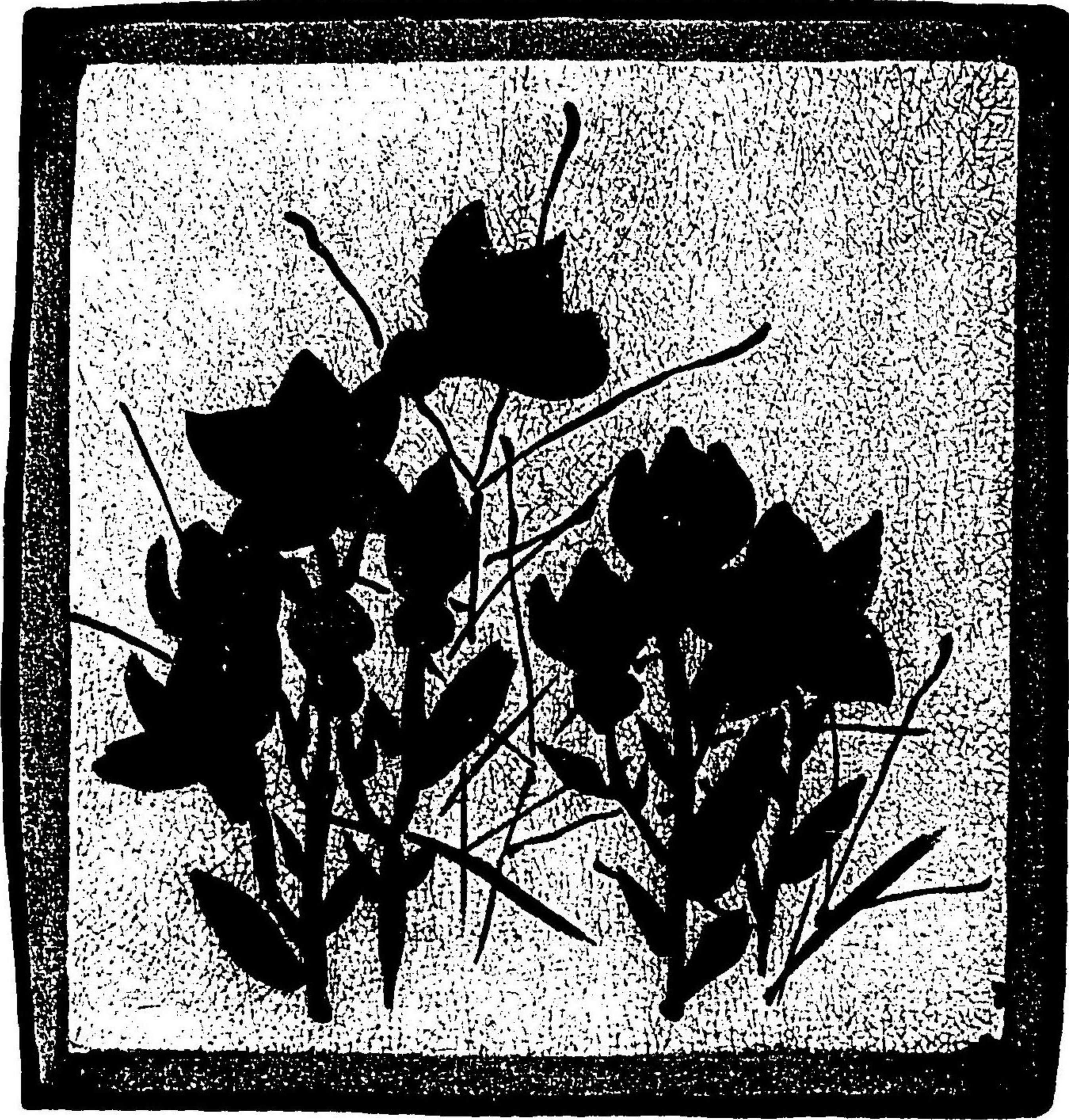
(直径五寸六分、高さ九分)

水萍模様向附

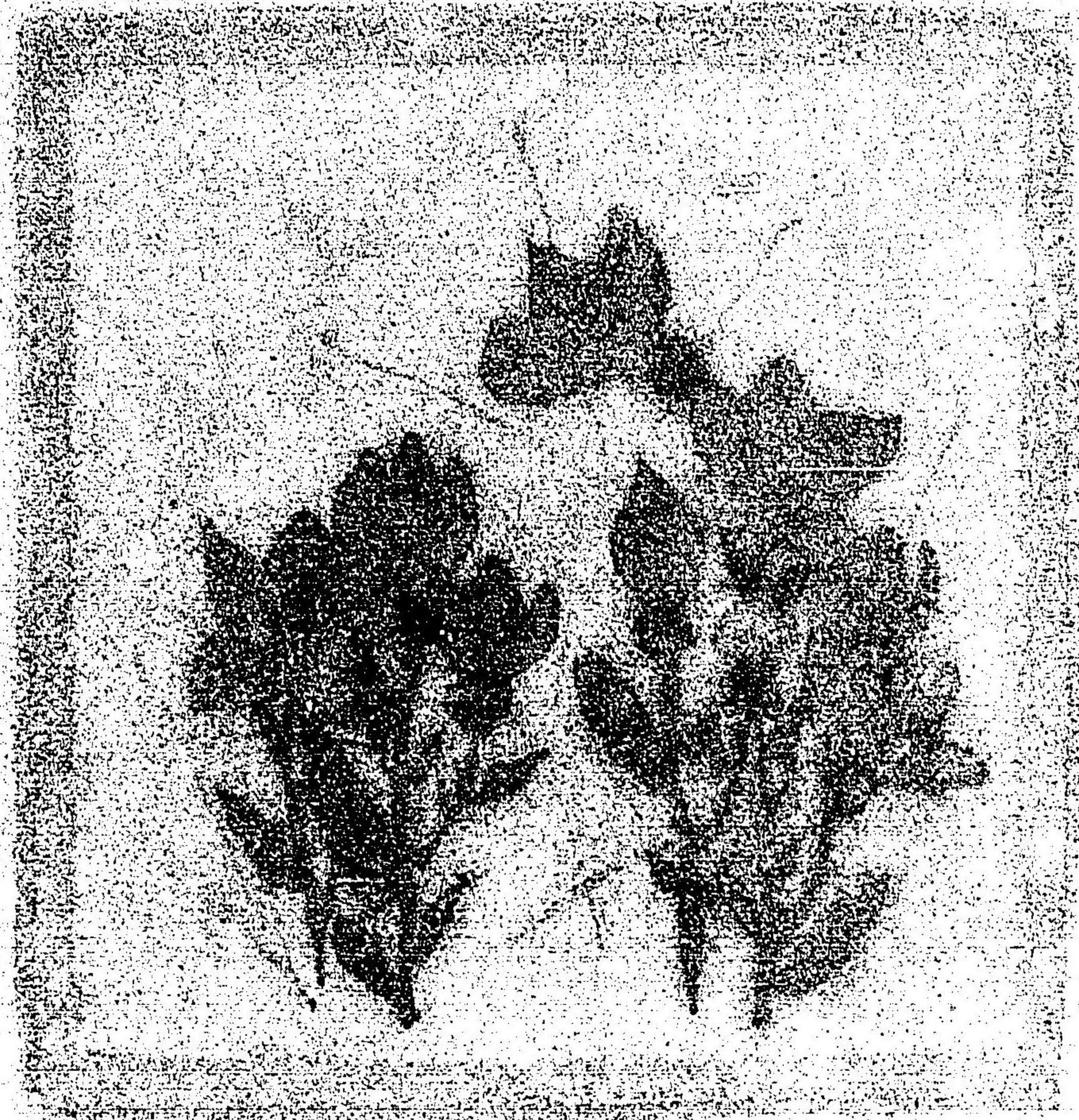
(直径七寸九分、高さ三寸二分、高さ七分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲にぐ掲る二器も亦是れ乾山の陶器に於ける特調を見るべき好標本なり、甲圖は數根の桔梗花に配するに、四五の莎草を以てしたるどころ頗る能く器面に適應せるのみならず、筆致造動にして一種幽雅の趣軸彩の上に溢る乙圖の水萍に至りては、自然を度脱して之を模倣化したるところ、即ち乾山特待の畫匠にして、他人の容易に企及すべからざる妙味あるを覺う



大  
出



夜鹿香合 (圖三寸六分高五寸一色)

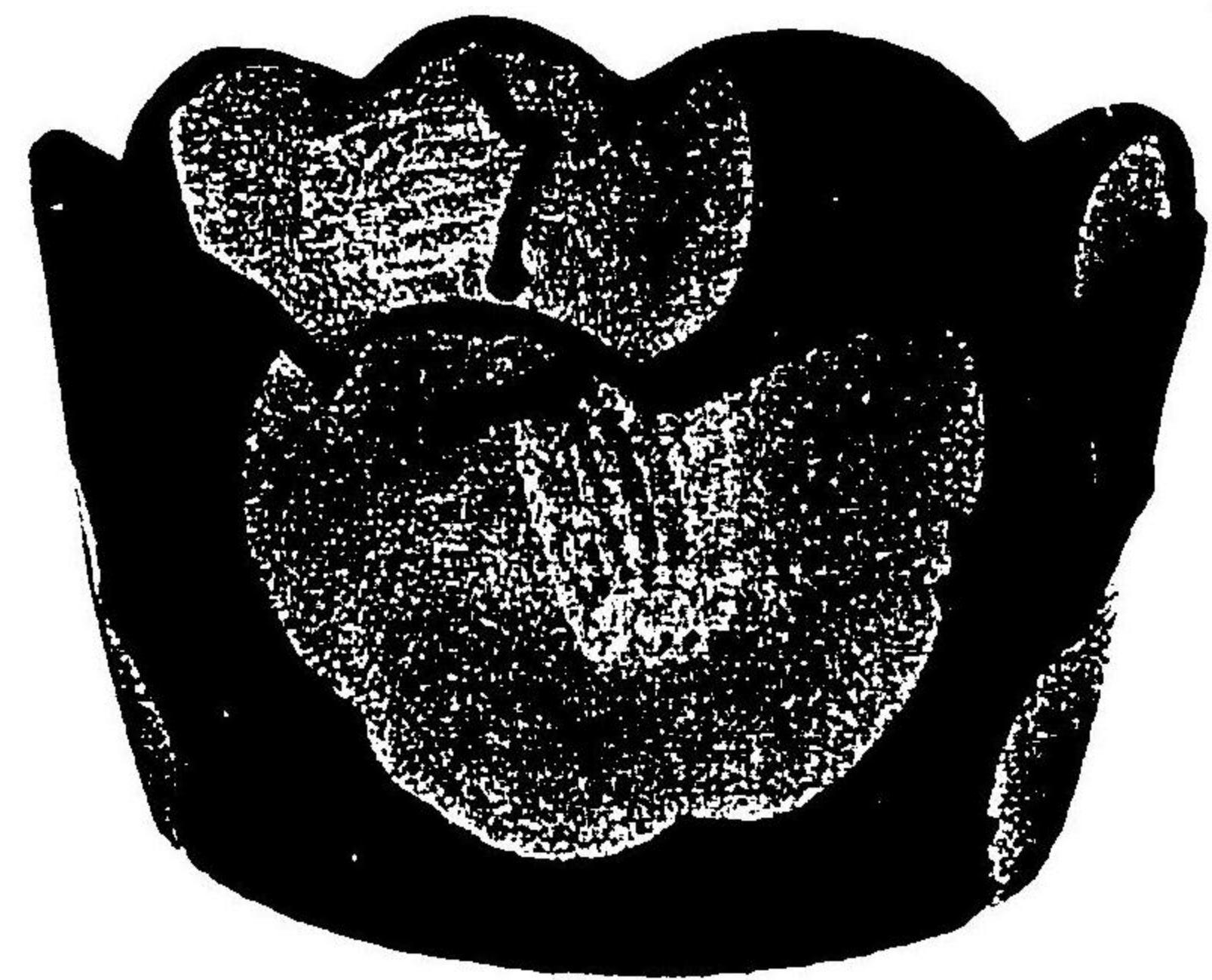
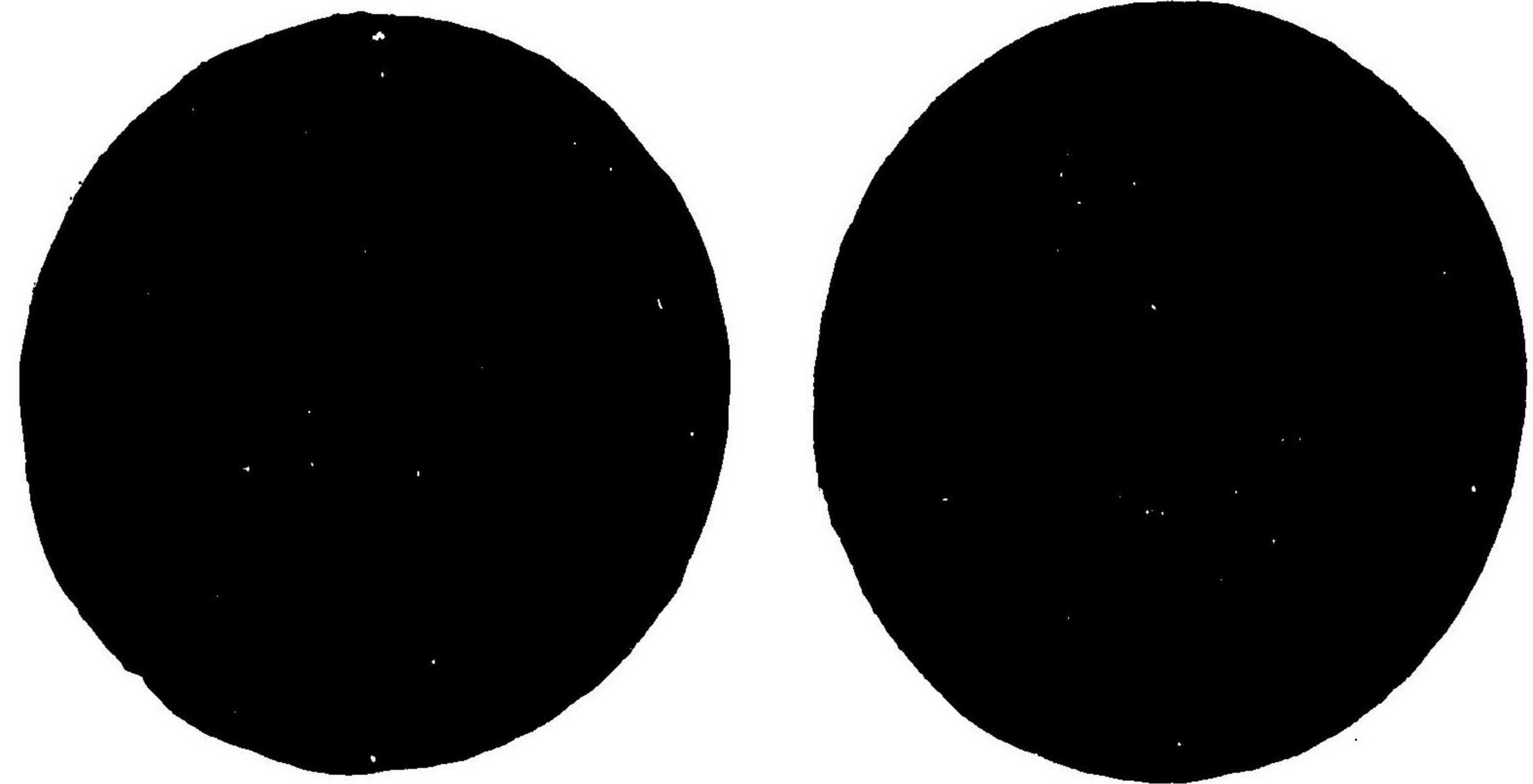
鹿鈕香合 (全圖三寸二分高二寸六分)

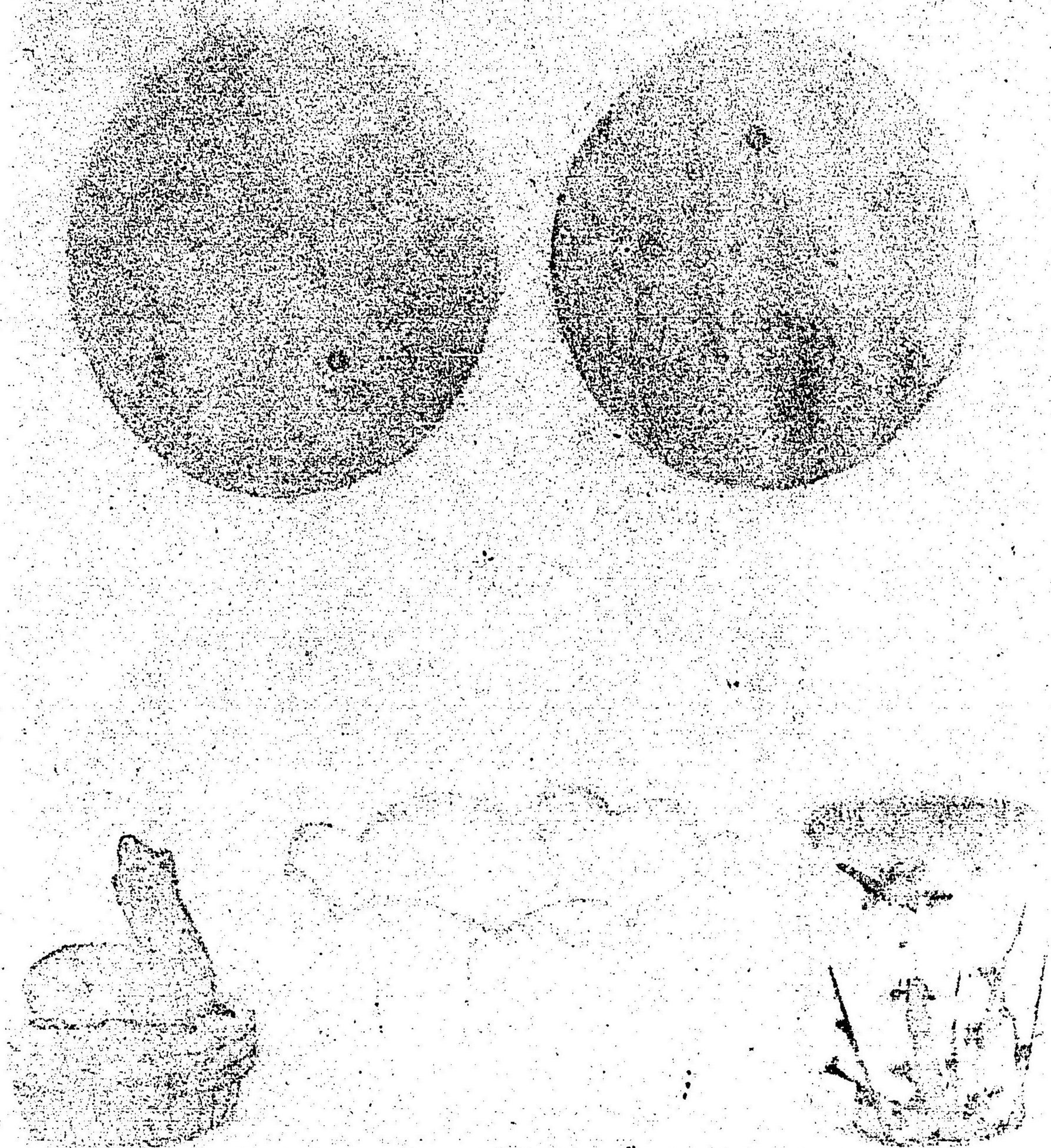
椿花式小鉢 (圖四寸一分高二寸四分)

梅圖湯呑 (圖二寸一分高二寸五分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出す四種は乾山の陶器に於ける意匠の變化を見るに足るべきものを撰  
 載したるものなり、夜鹿の香合は純黒の軸上に白描の孤鹿を圖し以て夜の意  
 を寓したり、また鹿鈕の香合は以て彼れが觀象應用の一例を見るべく、椿花式  
 の小鉢は以て器物形體の考案に新意を出せる技倆を窺ふに足り、湯呑の梅圖  
 に至りては最も能く乾山平生の特色を發揮したるものなり、此等の陶器は大  
 澤氏の祖先永之翁が乾山の書幅本冊所藏と共に抱一の鑑定によりて購ひ得  
 たるものなるが、夜鹿の香合の如きは殊に抱一の珍賞したる逸品なりと云ふ





山水圖及水仙圖向附

(各横六寸七分、横四寸、高八寸)

武藏國 大澤久右衛門君藏

本器の如きは乾山に在りては深く意を用ゐざるの作にして、  
 彼れが遺品中最も多く見る所の様式なり、今其最も佳なるも  
 のを撰びて茲に出せり、其形式は別に奇なる所なく、且つ黒釉  
 のみを以て圖したりと雖も、作者の特色は筆墨の間に溢れて、  
 全體の品格卑しからず、又其書趣は殆んど尤琳派の特調なく、  
 全く支那畫の風趣あり、是れ蓋し彼國船載の陶磁器より得來  
 りたるものにして、乾山が尤琳派以外更に畫材を茲に取りし  
 ことを徴知すべし



御玉作神  
山省



八哥鳥圖(紙本墨畫)

【圖一尺】

東京 別府金七君藏

圓形の小幀に、一羽の八哥鳥を書き之に配するに一塊の巨巖と四五の竹葉とを以てしたるに過ぎざれども、其毫鋒の造勢にして圓熟なる濃墨の淋漓として至妙なる能く鳥の真髓を發揮して筆々生動の趣を具へ鋭利なる瞻視は畫外の處に注ぎて必ずや之を誦むの機を逸せざらんとするの概あり、實に乾山畫中の最優品なりと稱すべきものならんか、其筆致頗る平生の作に異り、全く陶畫的習氣を脱却したるを見れば、何人も乾山が裝飾畫以外別に卓拔の畫技を有したることを首肯すべし。



八哥圖

八哥，鳥名也。其性喜居於水邊，其聲如人言，故曰八哥。此鳥之性，最為靈敏，且能學人之言，故為人所喜。然其性亦最為狡詐，且能欺騙人，故亦為人所惡。此鳥之性，最為靈敏，且能學人之言，故為人所喜。然其性亦最為狡詐，且能欺騙人，故亦為人所惡。

紅梅圖及花籠圖(紙本著色)

(各幅八寸五分、横一尺一寸五分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出す二圖甲は小嶺一樹の梅花を寫し、且つ例に依りて和歌を題せり。紅花を著けたる墨描の樹枝其布設甚だ宜きを得たるのみならず、落筆の流暢にして墨の超妙なる蓋し乾山作中稀れに見るの佳什なり。また乙は桔梗と女郎花を挿める花籠を寫せるに過ぎざれども、墨描を以てせる花籠と彩色を用いたる草花と自ら照應の妙を得たるを見る。



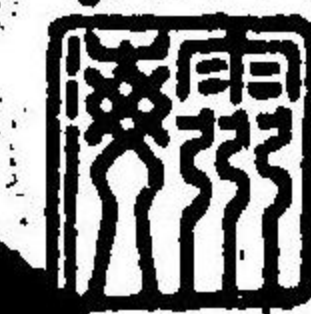
あまのこ

あまのこ  
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ



あまのこ

あまのこ

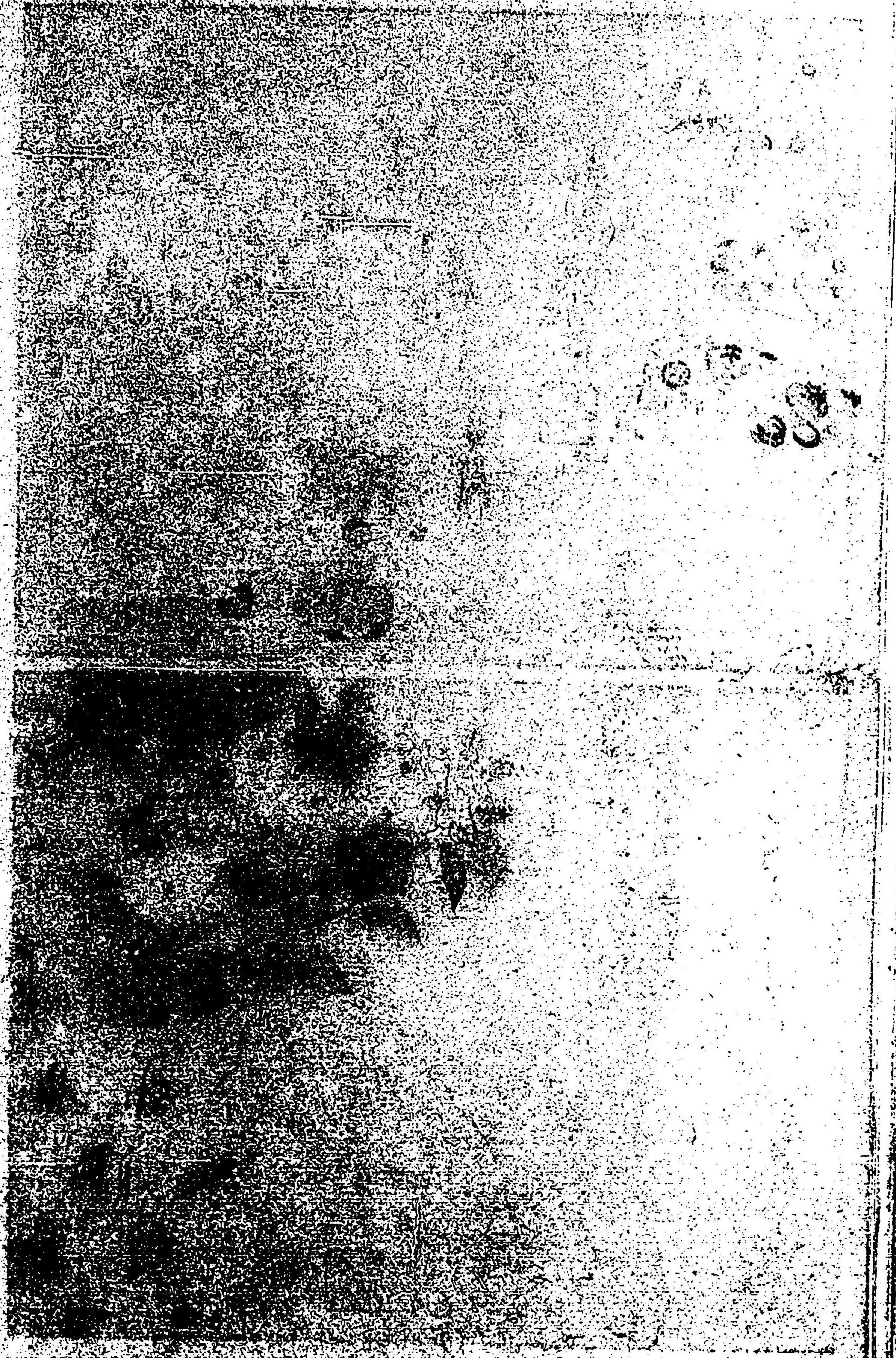
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ





紅白胡枝花圖(紙本着色)

(竪三尺七寸七分、横一尺六寸三分)

東京 酒井正吉書

乾山の遺品中本書の如き細巧精緻なる傑作は極めて稀れなり、其布  
置は乾山の本色として裝飾美上の配合を主とし、且つ其紅白の花を  
描くや必ずしも形似に拘泥せず、其素を畫くや白線を以て裏面を示  
せる外、没骨の墨描に石線を覆混せる新派畫法の法を用ひ、且つ斜形  
側面等の煩瑣なる寫實を裏脱して以て之を文様化せり、是れ乾山の  
乾山たる特長なりと云ふべし



さくら

梅

煉

ふ

ま

京

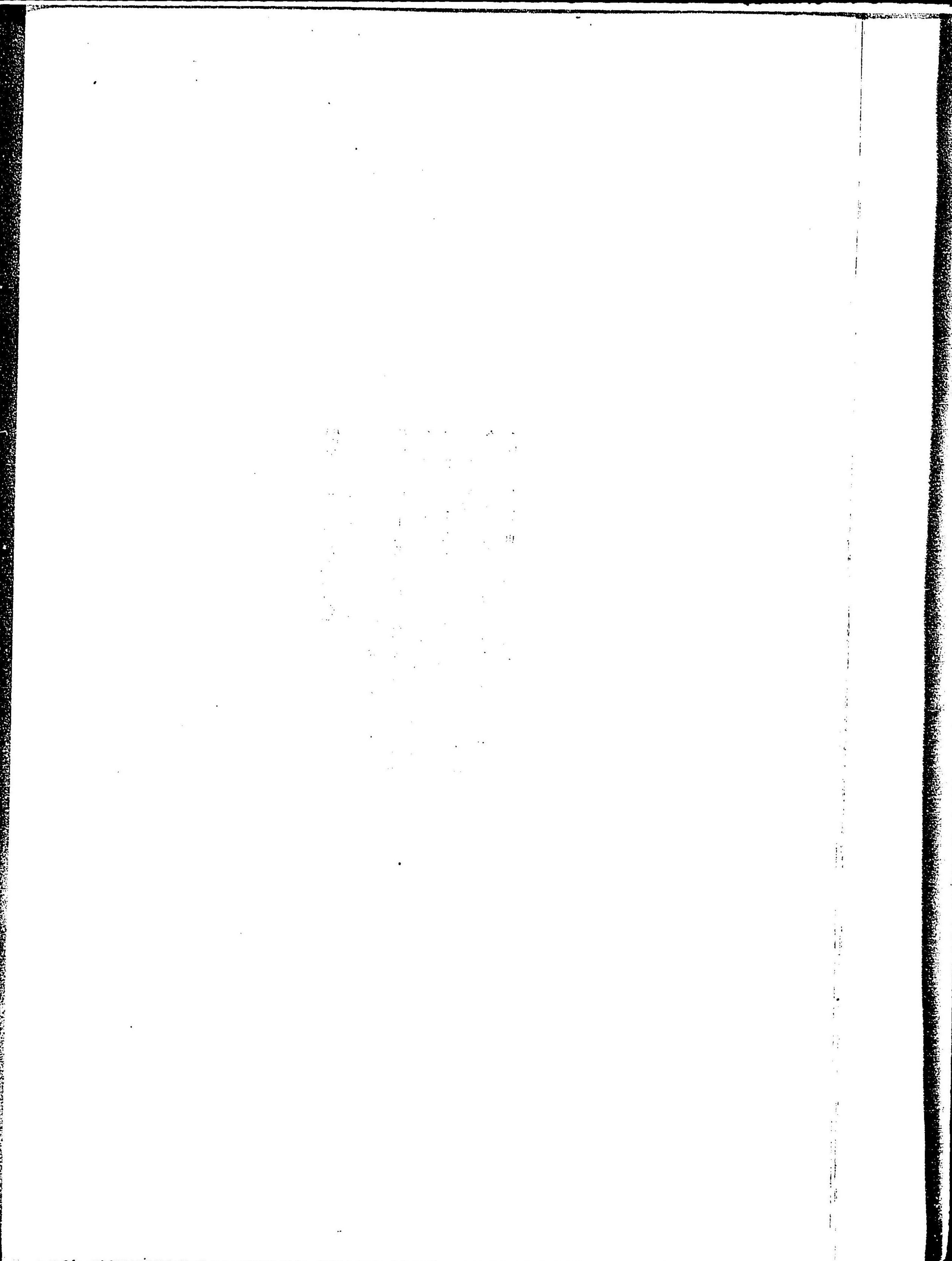
Vertical columns of faint text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

櫻花春草圖(紙本著色)

(横四尺三寸六分、縦一尺九寸)

武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出す圖の土坡及び櫻樹に於ける描法は、乾山の作中最も能く光琳の風趣を發揮したるものゝ一にして、爛熳たる櫻花は、藤岡重蒲公英等の草葉と相應じて、駘蕩たる春野の情致格表に溢る布局の如きも、敢て巧なるを求めずして、自ら帯映配合の美を成せり、而して草花に於ける筆致の稍疎氣を帯びたる所、即ち是れ乾山の特調なりと謂ふべきか。





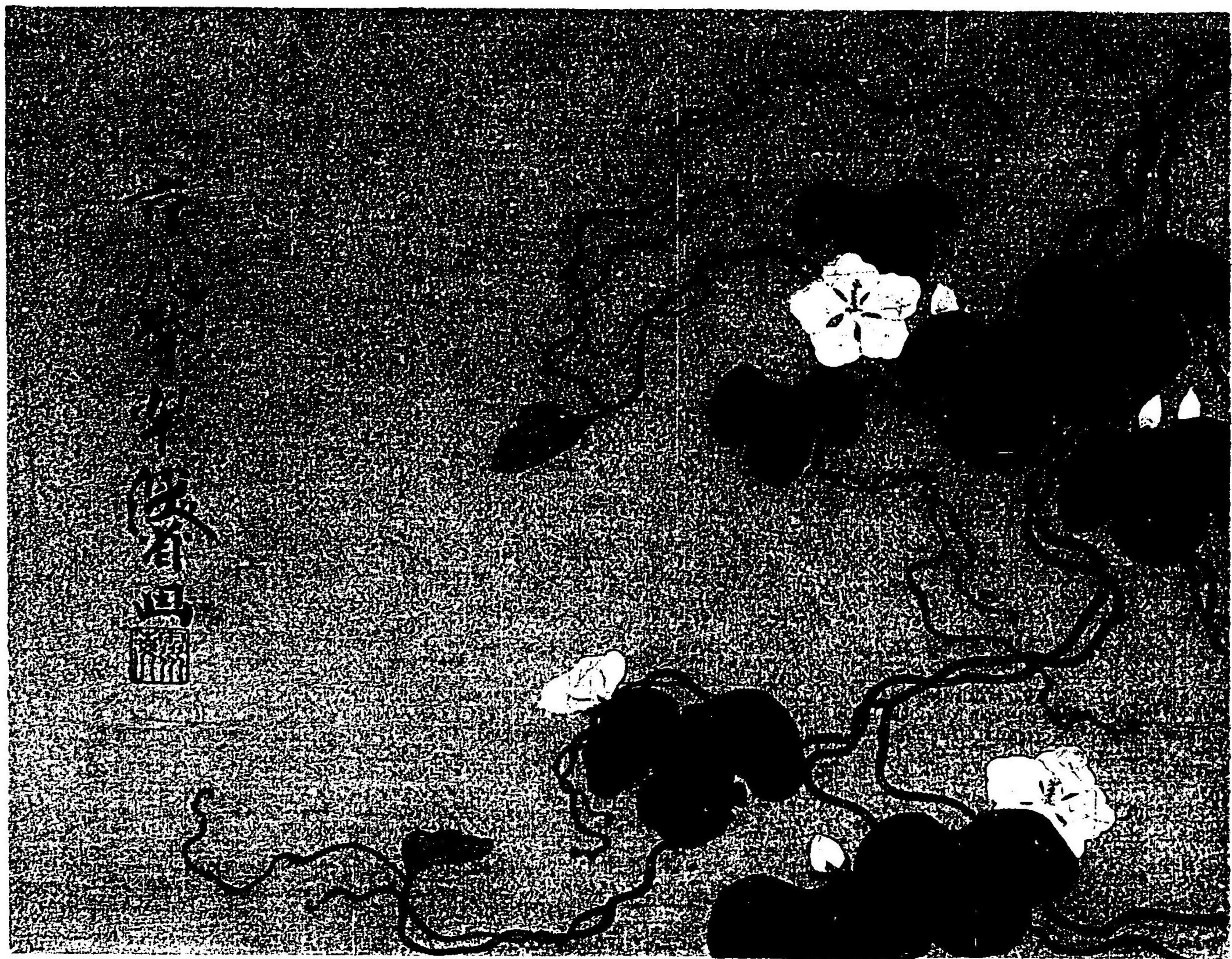


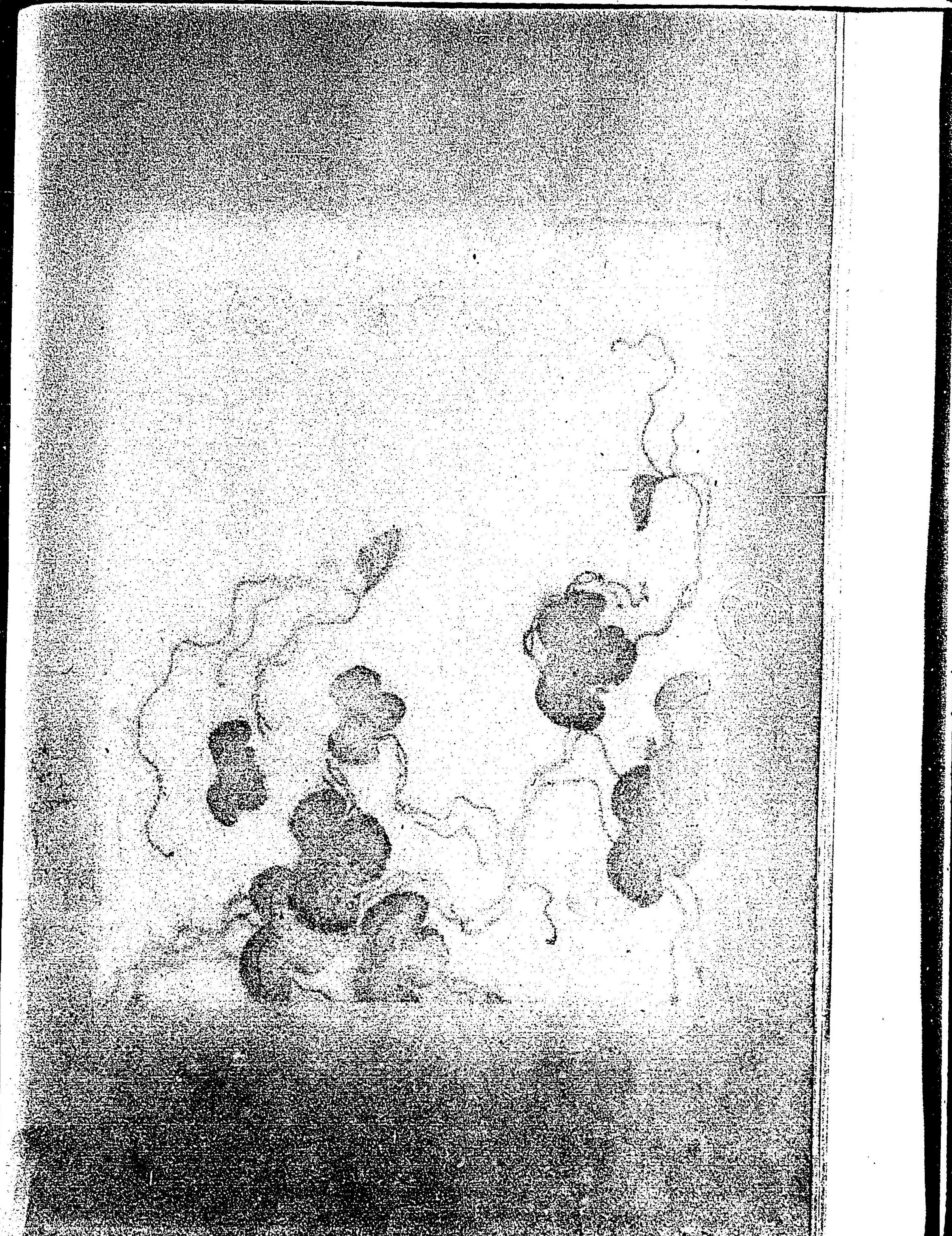
夕顔圖(紙本着色)

(縦一尺三寸五分、横一尺六寸六分)

武藏國 大澤久右衛門君藏

此圖また乾山作中に在りて緻密なるもの一にして平生の所作の疎逸なると稱其趣を異にし其婉曲せる絡蔓の如き殊に其巧を盡せり又其素は墨上に石緑を混じり花葉及び細蔓を描くに没骨法を用ゐたるもの即ち乾山常套の技法なり





山水圖雙幅(紙本墨畫)

(各幅三尺二寸二分、横九寸四分)

武康國 大澤久右衛門君藏

乾山の長技は由來裝飾畫に在りて其畫材は多く之を花卉に取れり、是れ光琳一派の特色とする所なり然れども乾山は其修養必ずしも光琳一派に局せずして亦好んで支那風の山水をも揮灑したり而も其畫は小品多くして大作極めて希れなりされば茲に出す雙幅の如きは乾山の山水畫中稀有の大作と稱すべきものにして其枯澗の壯筆縱横に揮灑し去りて渲染淋漓恣肆儻然なるが如き洵に雅玩に値すと謂ふべし乾山を自するに單に陶工若くは裝飾畫家を以てすべからざる所以即ち茲に存す此畫は大澤氏の祖永之翁が抱一の鑑定を以て購ひたるものなりと云ふ抱一また自ら之を其著乾山遺墨中に收載せり



京兆茶翠老人  
印



茶翠侯者  
印

花卉圖三幅對紙本著色

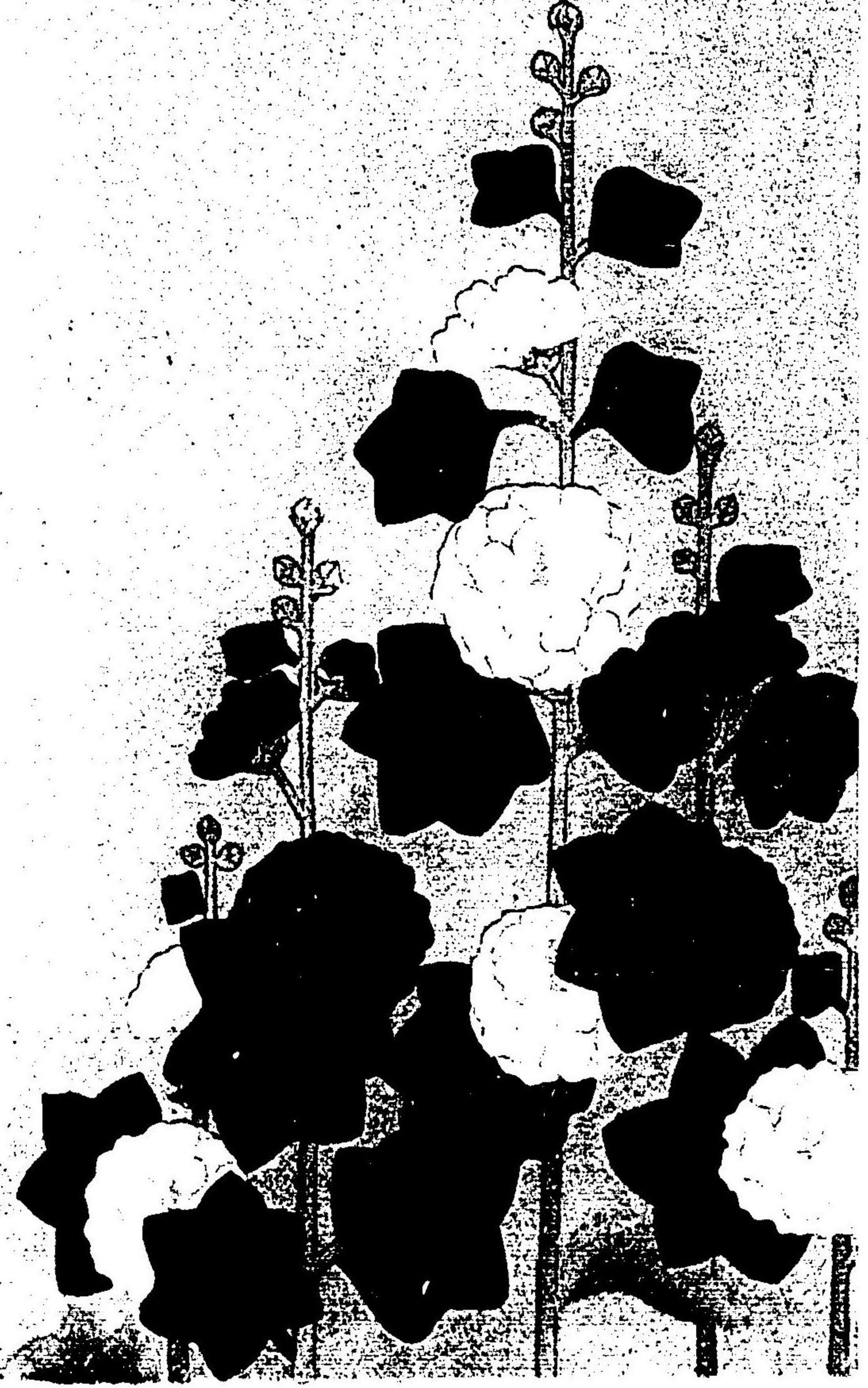
(各幅四尺三寸、横一尺八寸八分)

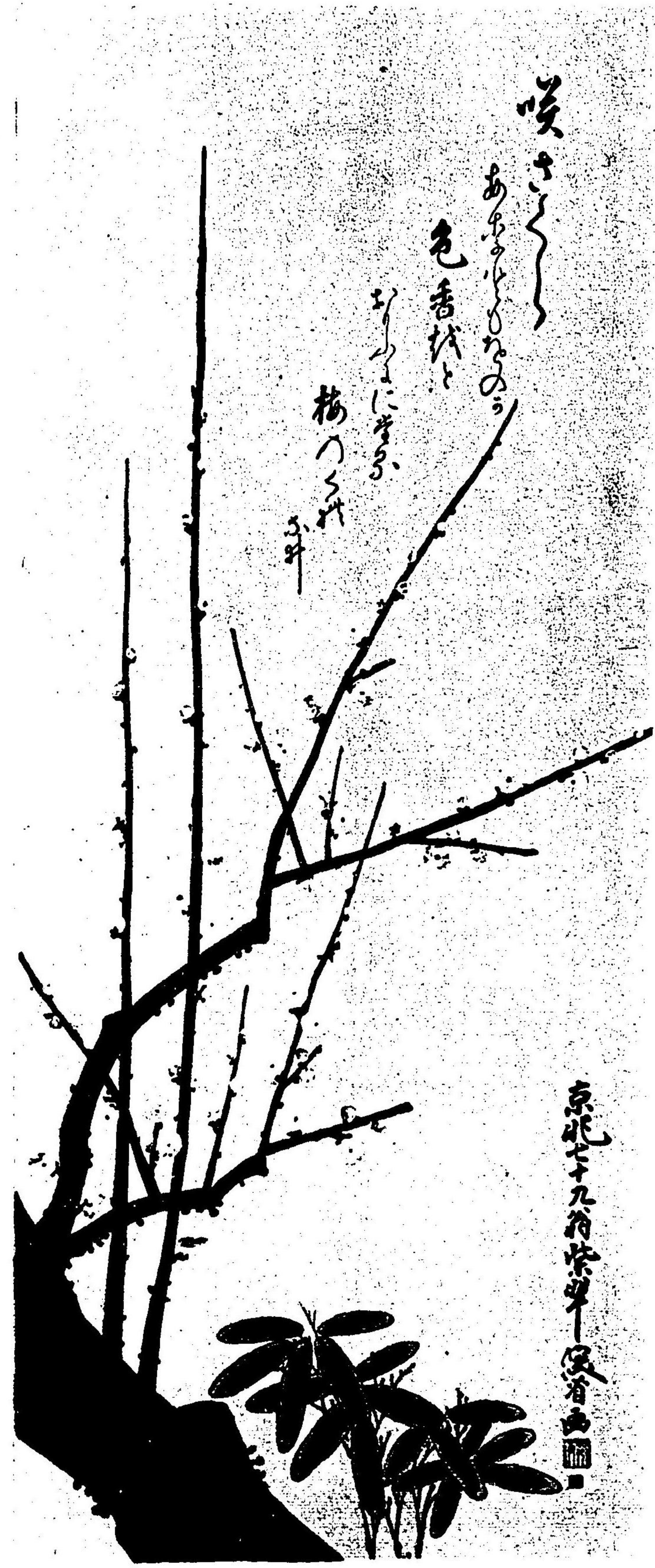
武藏國 大澤久右衛門君藏

茲に出す圖は、蜀葵、梅花に熊笹及び紅葉に菊水の三幅對なるが、第一圖は格短五莖の蜀葵を描出したるところ、其布置排列、一見何等の奇なく、後に其花の紅白と其葉の濃淡とを以て少しく色彩の變化を弄せるに過ぎず、構想頗る深氣あるを免れず、雖も而も自ら裝飾上の奇趣を存するに至りては、流石に人をして乾山の作なることを首肯せしむるに足るものあり、第二圖は布局必ずしも巧を求めずして、自ら巧に用筆、また一點の匠氣なく、色調の如きも頗る清雅にして、實に習靜堂逸禪の眞面目を窺ふべき佳作なり、而して其光琳風を消磨し去れる所、即ち此作者の新派中に挺立する所以なりと云ふべし、第三圖は乾山の作中最も精巧縝密なるもの一なり、其紅葉と菊花と兩段を成したるが如きは、敢て調和の妙を得たりと評すべからざるも、紅白の異彩と濃淡の變化は、以て能く一種の風趣を成せるを見る、池水に至りては、更に至濃の反色を用ひ、光琳の典型に従ひて、銀泥の波紋を描き、以て全幅をして好尚の裝飾畫たらしめたり、是れ實に新派の慣手段にして、寫生畫をして、獨り其美を擅にせざらしむる所以、即ち此に存す、此畫は拙一會て深く珍賞し、圖中題するところの歌章の、に大澤の文字あるを以て、其平生親善なりし大澤永之翁本畫の所藏者大澤氏三代前の祖に勸めて之を購はしめたりと云ふ、傳來亦以て歎するに足れり。

恐是牡丹重  
類紫又疑芍  
藥再翻紅

平安城逸人李九翁  
此詩一  
漢省各典  
全供一筆





淡雪

色香

梅の香

梅の香

京兆十九翁筆







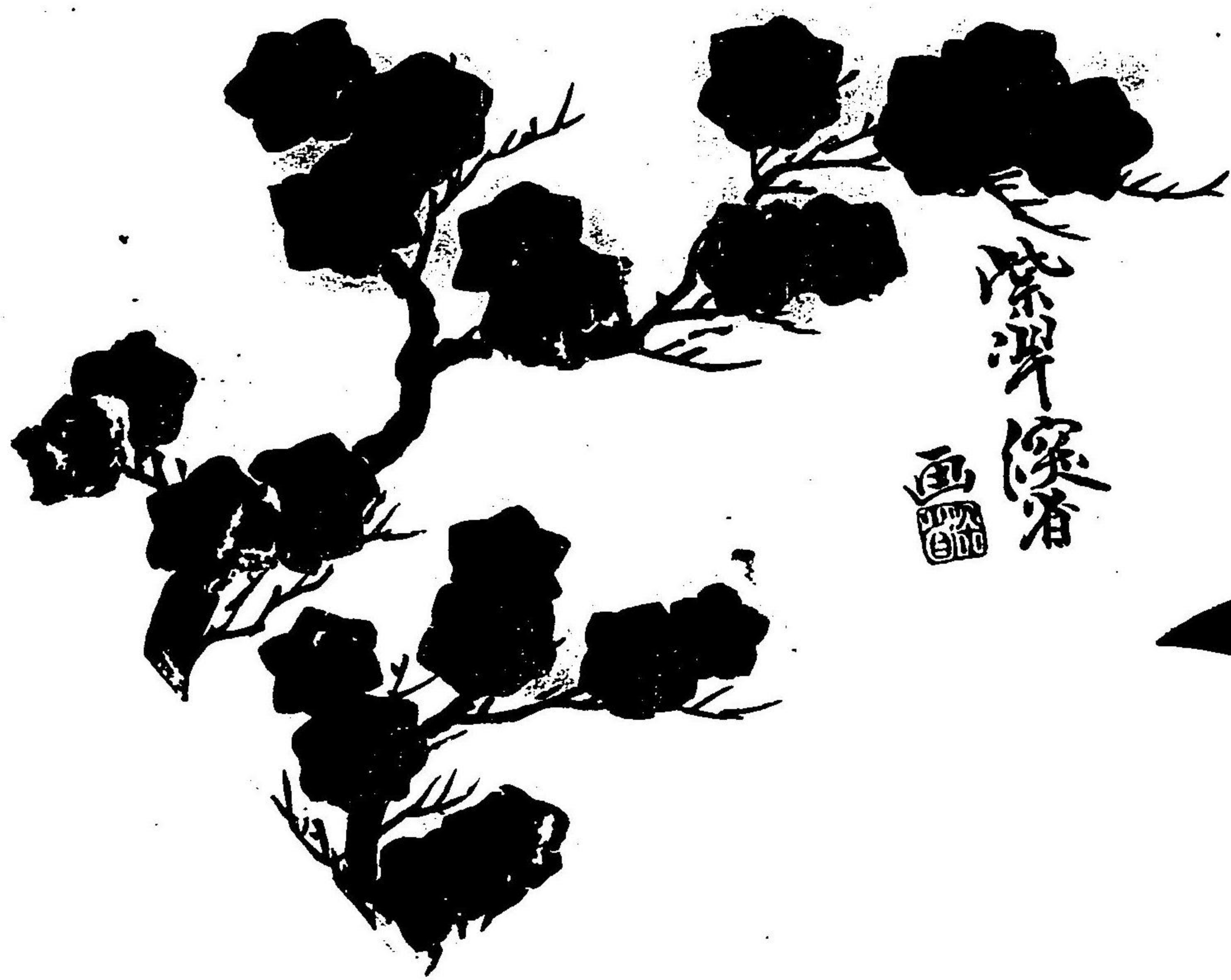


扇面楓樹雙鹿圖(紙本雲母地著色)

(扇上幅一尺八寸、下幅八寸二分、高六寸五分)

子爵松平重信君藏

乾山の意匠の意出でて、雲、墨、富、奇、状なるは、本圖、描、筆、するところの、  
圖に、徹して、明かなり、就中、本書の、如きは、殊に、奇想、天外より、落つるの、  
妙あり、圖中の、左方、單に、兩枝の、紅葉を、描き、右方、更に、一壇の、土境を、寫  
し、且つ、金銀泥のみを、以て、吻々たる、雙鹿を、點出したるが、如き、趣、筆、  
心の、作に、あらずと、雖も、而も、情趣の、超妙なる、到底、形似の、末に、拘々た  
る、凡工の、企及すべからざる、ところあり、又、紅葉の、濃淡、土境の、石、縁、及  
び、鹿の、金銀泥等、賦彩、配合の、巧亦、以て、珍貴するに、足れり



深溪溪者  
画

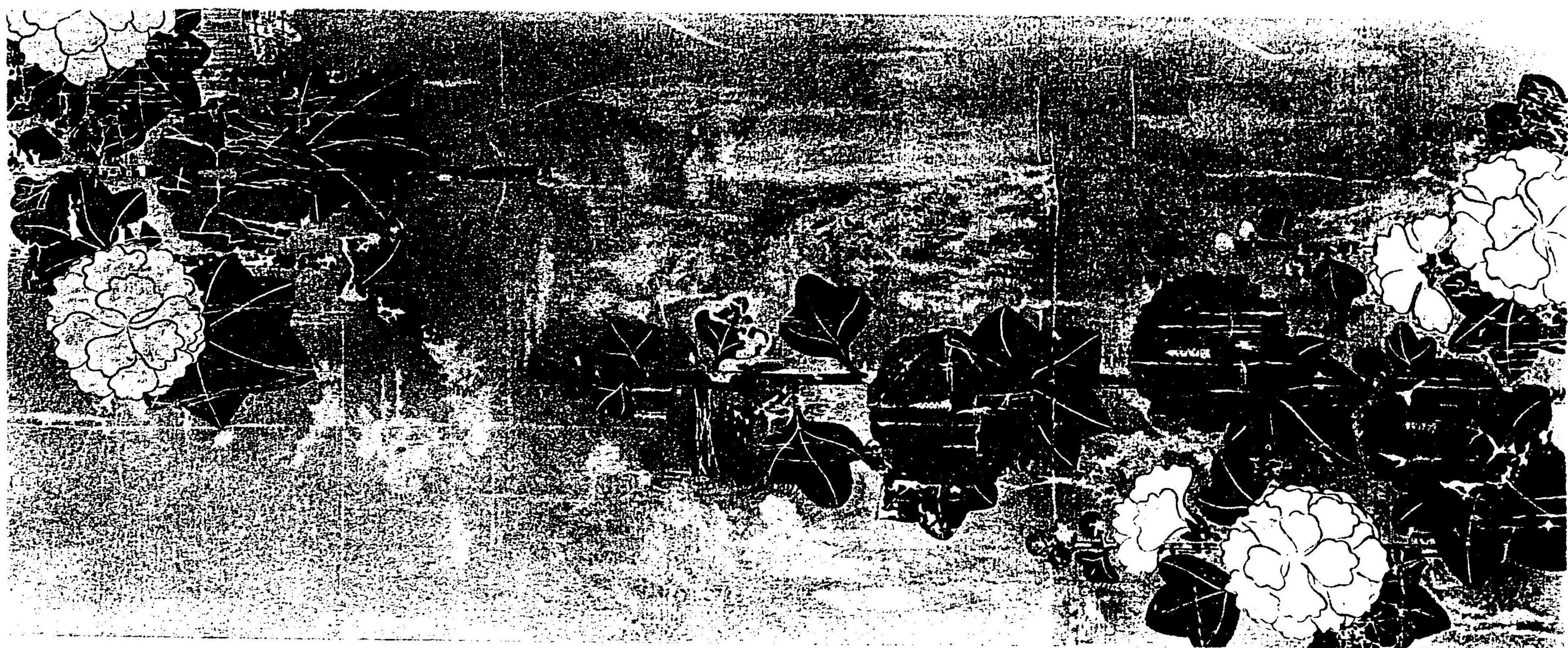


蜀葵圖(紙本金地著色)

(縦三尺一寸、横一尺三寸三分)

東京 別府金七君藏

茲に掲ぐるものは前に出す蜀葵圖に比するに一層布局の妙趣を成せるを見る而して粉白殷紅の花深緑の葉と共に金箔地に反映して燦然たる美観言ふべからざりしもの、絢爛彩色の爲めに却て蒼古典雅の趣を帯び來りて一種高尚の致を添へたるが如し、由來乾山好みて蜀葵を畫く是れ蓋し其自然の形影よく乾山の主とせし裝飾的美の本質を具へたるを愛したるに由るものならんか、此圖は二枚折の屏風に貼付せらるゝ二葉中の一なるが、他の一圖には華洛八十老漢素翠深省畫の落款あり、以て其死後の前年に於ける作なるを知るべし



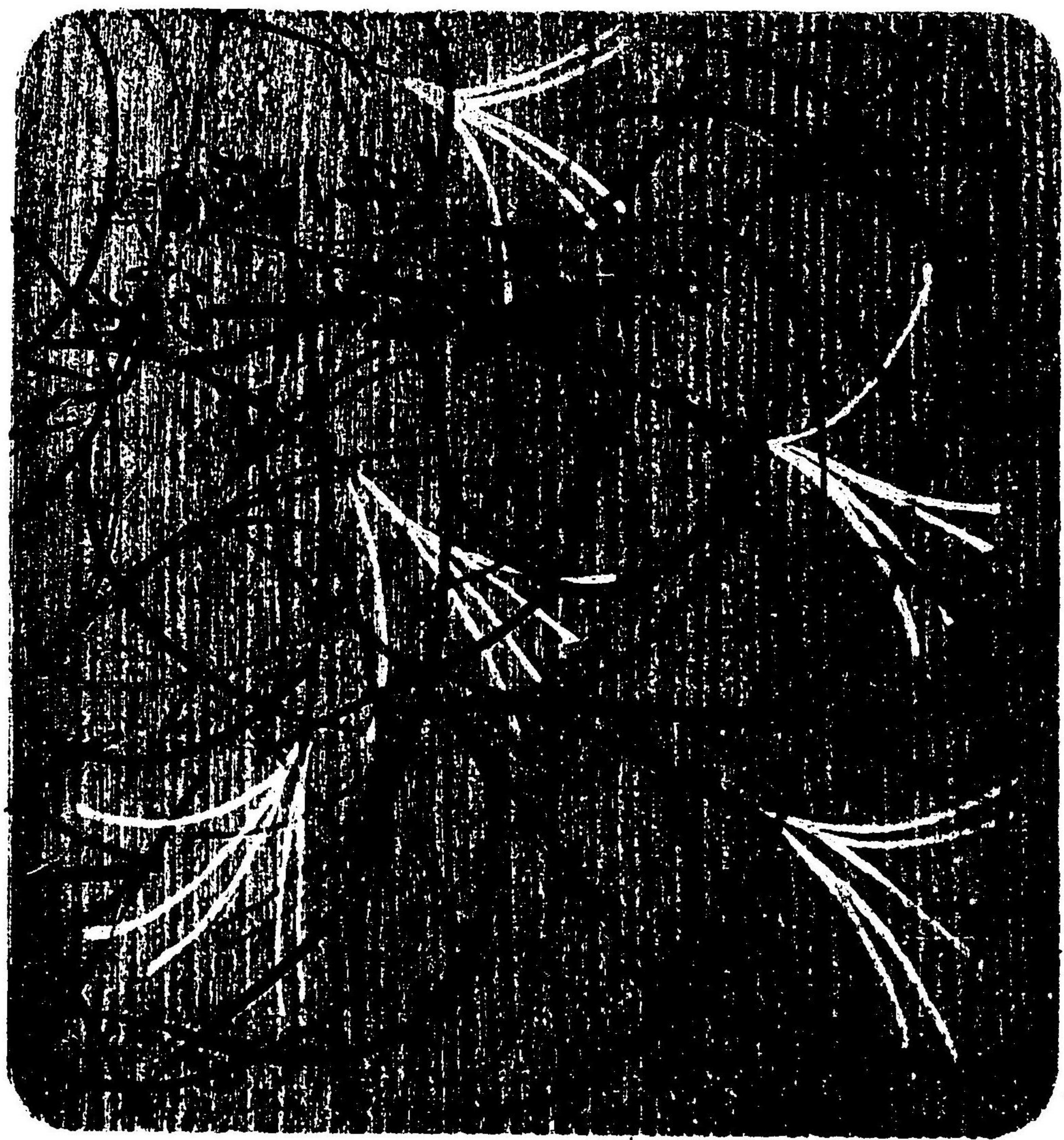


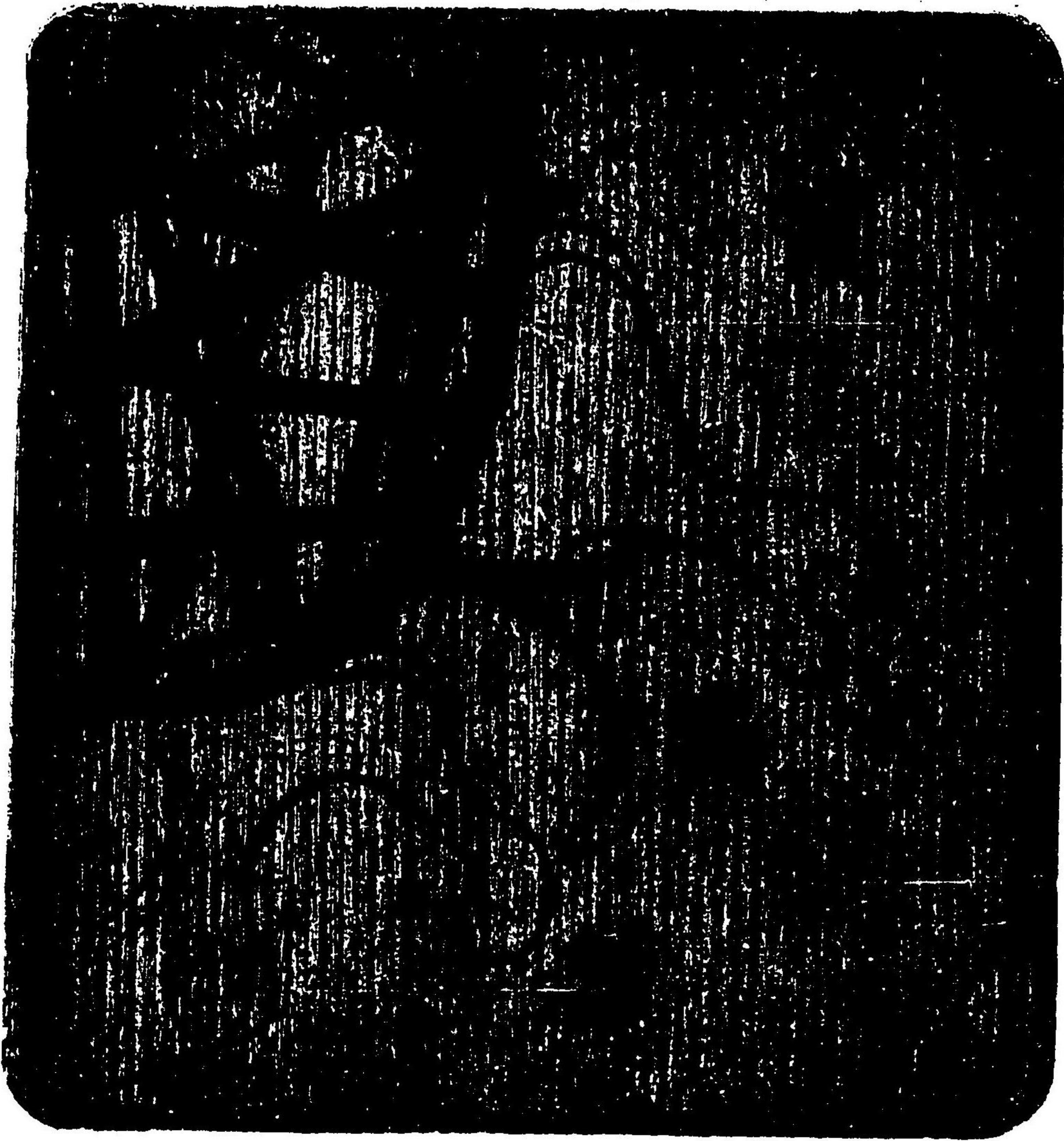
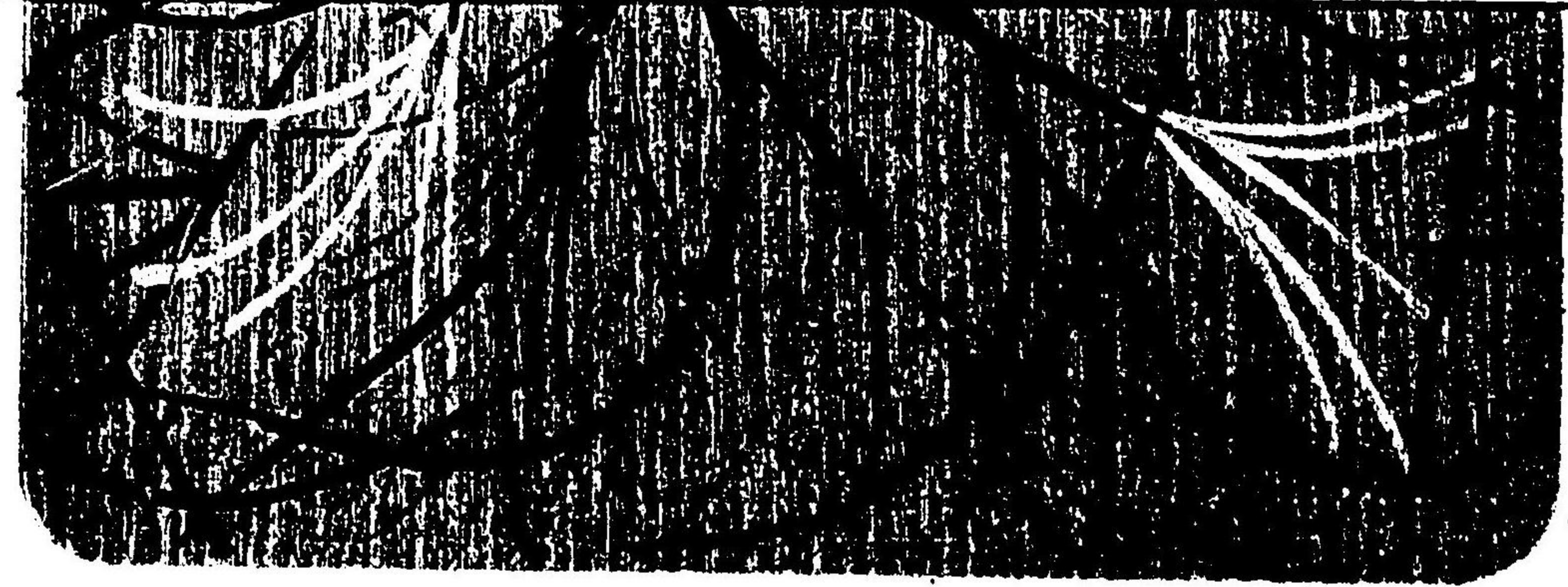
蛇籠及薄圓桐盆

（高九寸三分、幅九寸一分、深一寸九分）

東京 別府金七君藏

乾山の多般なる趣味と豊富なる才氣とは、往々丹青と工工との外に溢れて、或は時に裝飾を弄び、或は圓柱に出すもの、如き別圓の繪飾を試みたり、本器は木理の極めて緻密なる桐材を以て作れる、亂れ面式の小盤なるが、其内面には淋漓たる濃墨と蒼蒼なる毫筆とを用ひて、蛇籠を書き添ふるに、幾絶限りなき水波を以てし、且つ乳金にて、散羽の千鳥を加へたる、ところ趣興律々として、清くが如し、又裏面には胡粉金泥、緑青及び、麝香を以て、薄を掻き、亂雜の裡に、自から配合と統一とを保たしめ、色調、描線、幽雅の情趣、胸するに餘りあり、其表裏の反映、何等の奇想を而して、是れ乾山、残年の作なるを思はば、以て、彼れが老ひて、益々、技能の高かりしを見るべし。





11  
12  
13

渡邊始興

渡邊始興通稱は求馬京都に生る、近衛家の臣にして、豫樂院家照公に仕ふ、書を狩野家に學び、其作尙信に似て殆んど之と衝を争ふに見ると稱せらる、後光琳の門に入りて深く其法を得たり、應舉常に之を推稱して能手と爲せりと云ふ、寶曆五年七月二十九日歿す、歳七十三

始興の遺蹟中、其前作に屬する狩野風のもの、之を本書に收めずして、専ら光琳派に歸して、より後の作品を網羅せり、然れども精しく之を察賞し來れば、先修の狩野風は其終生の作に涵淪して、自ら光琳派中に於ける始興の一特色を成せるを見る、而して其所謂狩野風は、殊に用筆の洒落なりし尙信の趣に近くして、剛勁の質少かりしかば、自ら光琳の圓滑なる筆致と渾融調和するに宜しかりしなり、是を以て始興の畫風は墨情淋漓として、豐潤筆路柔滑にして宛轉たるどころ、殆んど光琳を凌駕せんとするものなきにあらざる、應舉の始興を推賞せし所以想ふに亦茲に存するならんか、而して乾山と始興とは同じく光琳に學べりと雖も、始興の流麗は乾山の疎樸と殆んど全く其所趨を異にせり、蓋し乾山の作中最も流麗なる筆と雖も、其豊樸なること到底始興に及ばず、始興の作中最も簡樸なるものと雖も、其逸興適かに乾山に如かざるなり、然り而して始興は人物花鳥共に之を善くしたりと雖も、而も乾山の如く裝飾畫を主としたるに非ずして、純正繪畫として之を作れるもの、只其畫風の致す所、自ら裝飾美の本質を具へたるのみ、隨ひて乾山の如き應用圖案上の奇想を馳せたるものを見ず、是れ實に一光琳より出でて、各一家の特調を成したるどころ、自ら乾山の乾山たり、始興の始興たる所以なりと謂ふべし



この屏風は、山景を主題として、遠山、中景、近景の三段階に分けて描かれている。遠山は淡い墨でぼかして描かれ、中景は墨の濃淡で山容を表現し、近景は墨の濃く、草木や人物の細部が描かれている。全体的に淡彩の風格が感じられる。

駒迎圖屏風一雙(紙本淡彩)

駒迎圖屏風一雙(紙本淡彩)

(各縦五尺五寸、横一丈一尺五寸)

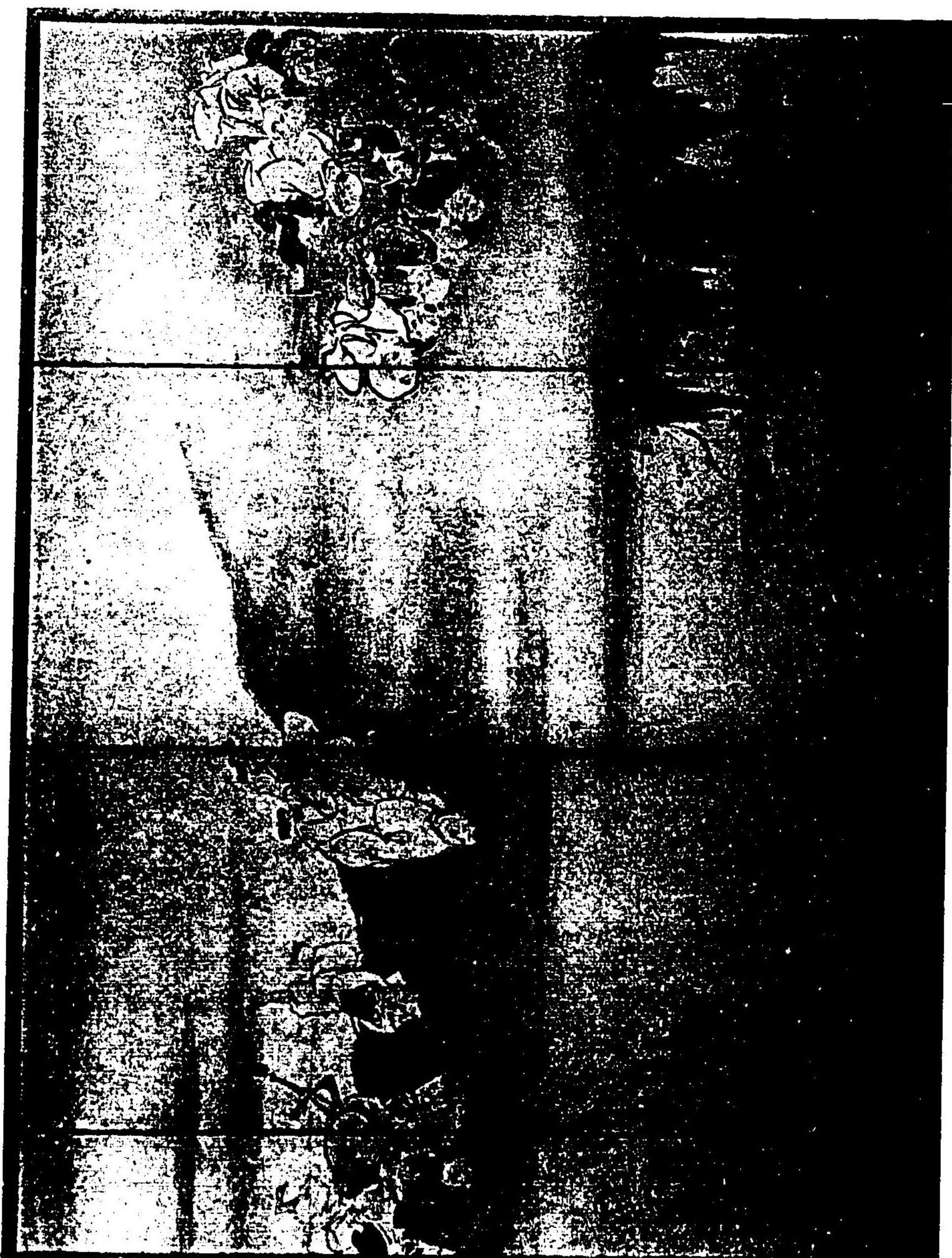
京都 福井成功君藏

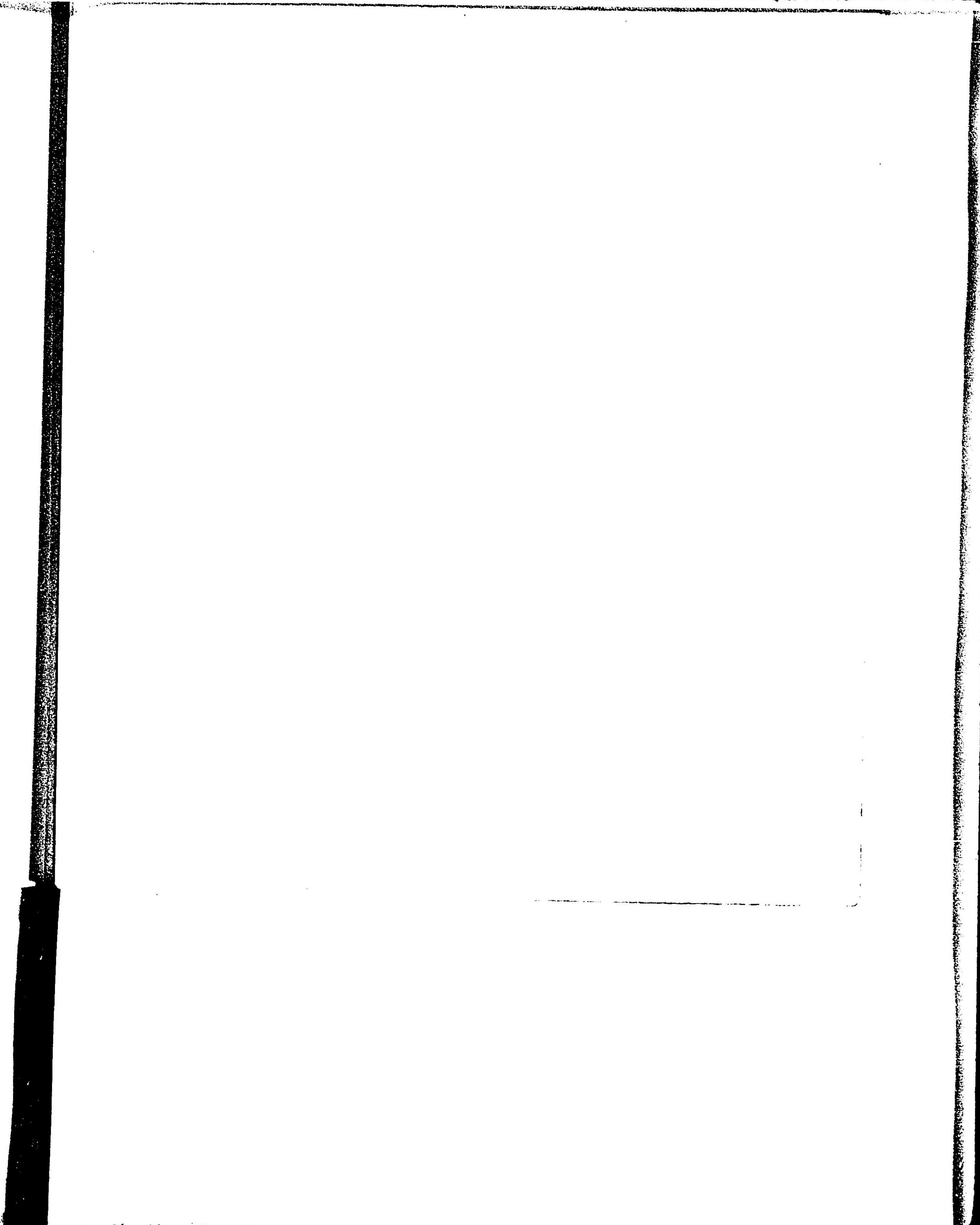
茲に出す一雙の屏風畫は、衛府の官人が郡國の貢馬を迎ふるの圖にして、甲は貢使官人に騎し、乙は官人其馬を曳き、而して兩者共に一羣の下民が其儀を見るところを寫せるものなり。落筆匆々、輕意の作にあらざる、且つ其傳彩の如きも未だ完成せるものにあらざるが如し。雖も大局の布置其宜きを得て、寫儀の款情は、面貌姿態に都鄙貴賤の變化を弄したる諸人物の滑稽なる趣に寓せられたり。其風逸なる畫風は頗る光琳派の特色を帶ぶと雖も、使人迎接圖中の樹法及び人物衣褶の描法には、また先入たる狩野風の餘影を認むべきところあり。想ふに始興の光琳派に於ける造詣尙未だ深からざる頃の作ならんか。





The right page of the book is mostly blank, with some very faint, illegible markings or ghosting of text visible near the top edge, likely due to the scanning process or the original document's bleed-through.





駒迎圖(紙本着色)

(竪三尺五寸五分、横九寸六分)

京都 松坂久兵衛君藏

駒迎のことは既に前に出だせる屏風書の解説中に述べたり、本圖は始興の作中殊に古格に富めるものにして、輕妙な用筆と飄逸なる人馬の風姿とは共に古土佐の餘蘊を傳へたるのみならず、亦善く光琳の骨氣を奪へり而して其肥馬騁りて制し難きの狀に至りては洵に氣韻生動の妙ありと謂ふべし



桃花流水圖(絹本着色)

(竪四尺八寸、横一尺一寸九分)

東京 別府金七君藏

茲に出すものは一樹の桃花流水に臨みて吟賞たる陽春の光景を現はすの圖にして、樹枝の描法筆致例の如く輕暢ならずと雖も、而も結暈潑墨の樹幹及び軟紅嫩綠の花葉に配合せる色調と共に却て温乎玉の如き和氣を存するを見る又水線に至りては頗る能く光琳の風趣を發揮せり蓋し是れ始興の作中に在りて最も典雅なるものゝ一なるべし







壽老對梅圖(絹本着色)

(縦一尺三寸七分、横二尺五寸)

東京 別府金七君藏

茲に出すものは壽星老人坐して梅花を賞し、一個の侍儀杖頭  
に一卷の仙書を著けたるを持ちて其後に立ち、白鶴白鹿之に  
伴ひて悠遊顧阿するところを寫せるものなり、古來壽老を畫  
くもの頗る多しと雖も、其者想像ね平凡にして鑿實に邁すも  
もの尠なし、然るに本圖の如きは殊に慧匠の清新なるものに  
して、筆致輕妙墨氣淹潤なるのみならず、情趣の飄逸なるに至  
りては、洵に能く光琳の特技を承ふものと謂ふべし。



花卉圖雙幅(紙本着色)

(各幅三尺六寸四分、全幅一尺三寸七分)

公卿近衛文康君藏

茲に出す雙幅は始興遺蹟中の逸品にして最も能く光琳の風趣を發揮せるものなり、傳中既に述ぶる所の如く、始興は近衛公の家臣なりしを以て此畫は蓋し彼れが主家の爲めに其平生の蘊蓄を傾け盡して揮灑したるものなるべし之を展覧するに、甲圖の玉蘭花に配するに一株の椿と一枝の梅とを以てし、乙圖の桜花に添ふるに桐の嫩枝を以てしたるどころ、構想筆法、布局秀逸筆路また圓熟なるのみならず墨氣潤澤淋漓たる裡淡淡暈和の巧を弄し且つ色彩を濃混したる妙技に至りては、恐らく光琳と雖も之に過ぐるを得ざるべし、また淡墨を背景に渲染して色調明暗の諧和を圖りたるが如きも、日本畫の花卉に其例多からざるものにして、亦作者苦心の一工夫なり









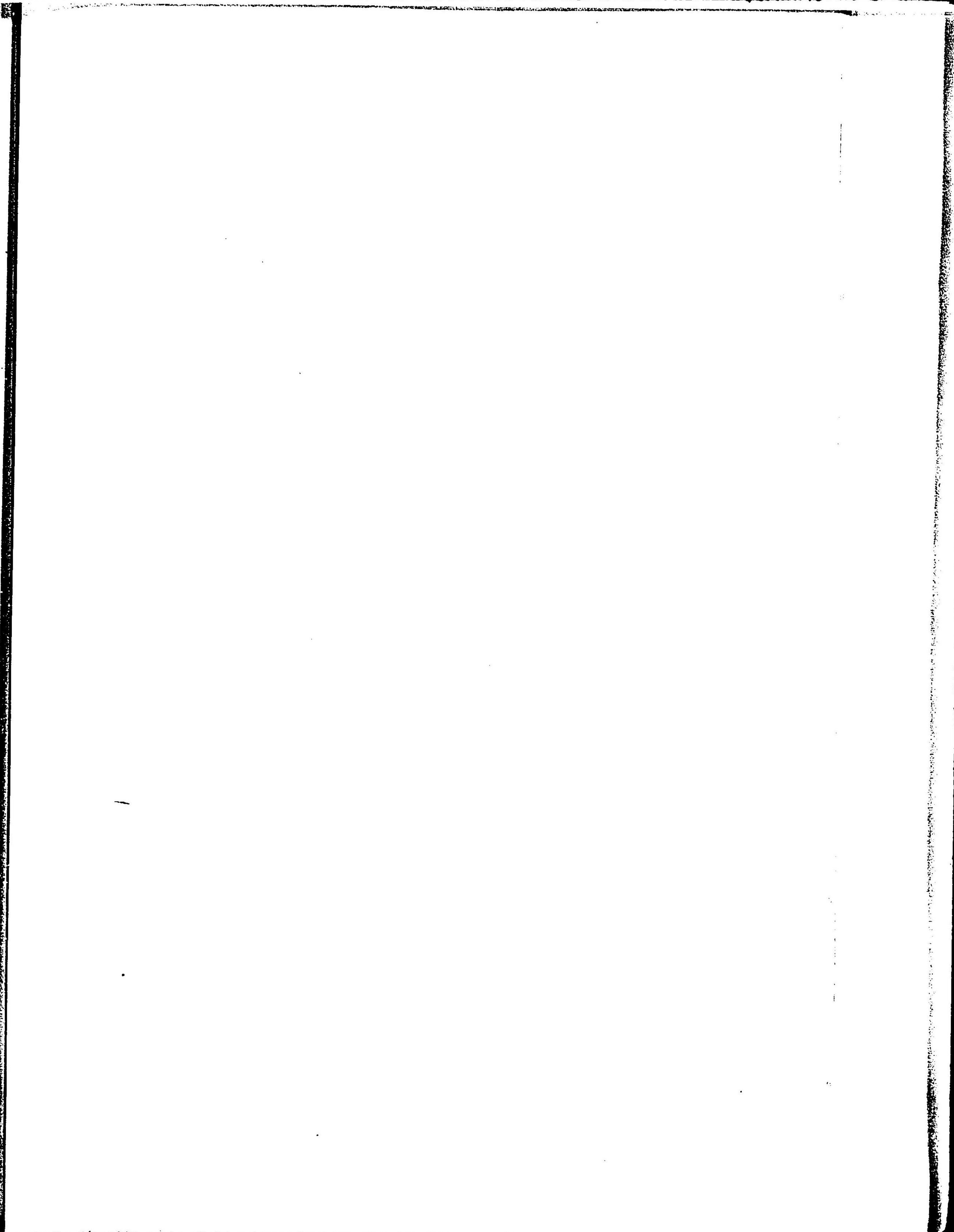


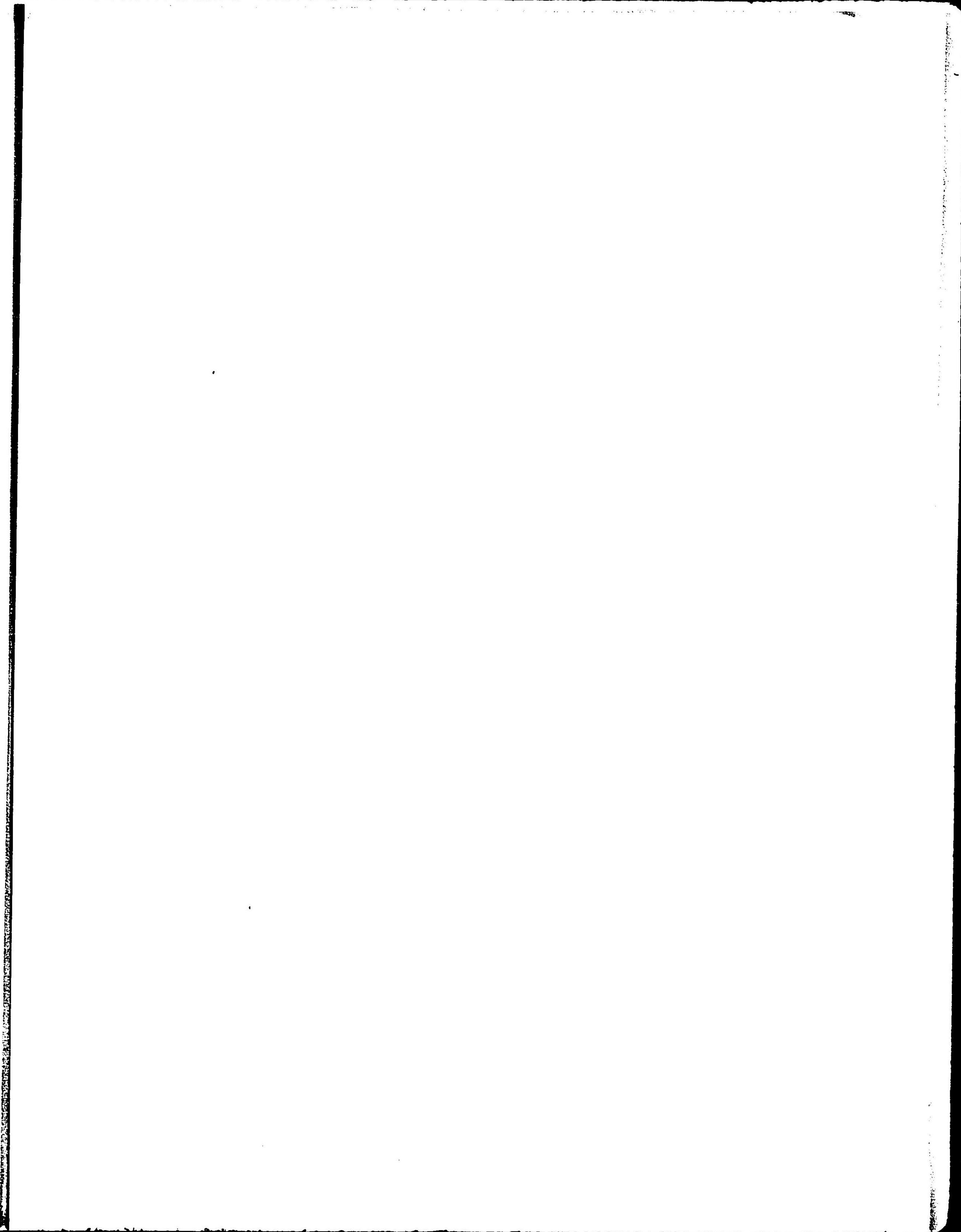
草花圖雙幅(紙本着色)

(縦三尺二寸八分、横一尺二寸三分)

東京 三井八郎次郎君藏

茲に掲載するものは、前に出す玉蘭及び棕栢圖の雙幅に比すれば、落筆更に精巧緻密にして、傳彩極めて優美なるのみならず、維然たる草花を縦横揮灑し去つて、布局最も超妙なるを見る殊に乙圖の如き、一機の字を全幅に大寫し之に配するに種々の秋草を以てしたる配合の妙に至りては、實に始興平生の蘊蓄を傾盡したるものにして、恐らくは光琳と雖も亦之に加ふる能はざるべし、洵に珍貴愛惜すべき逸品なり





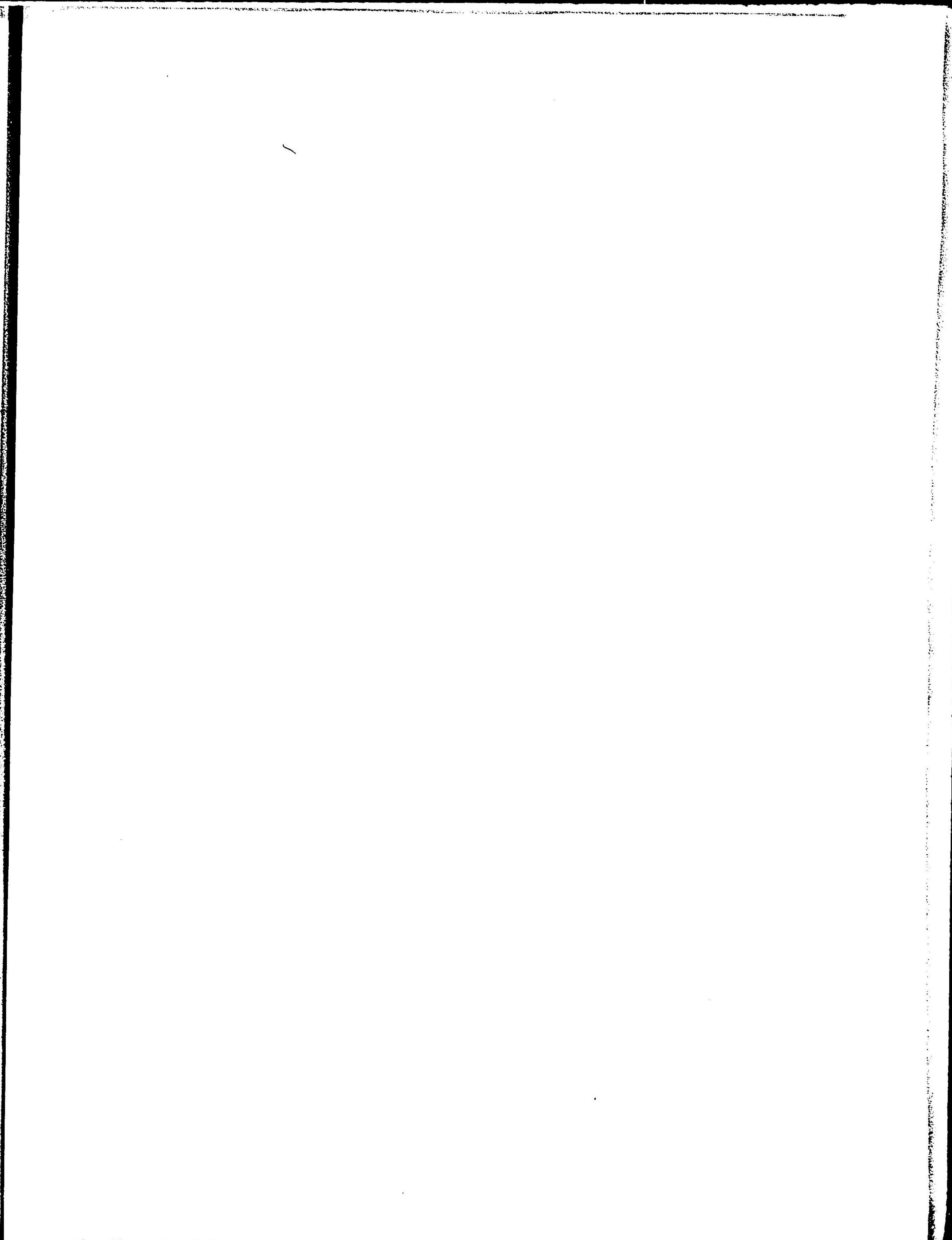
耕作圖(杉戸著色)

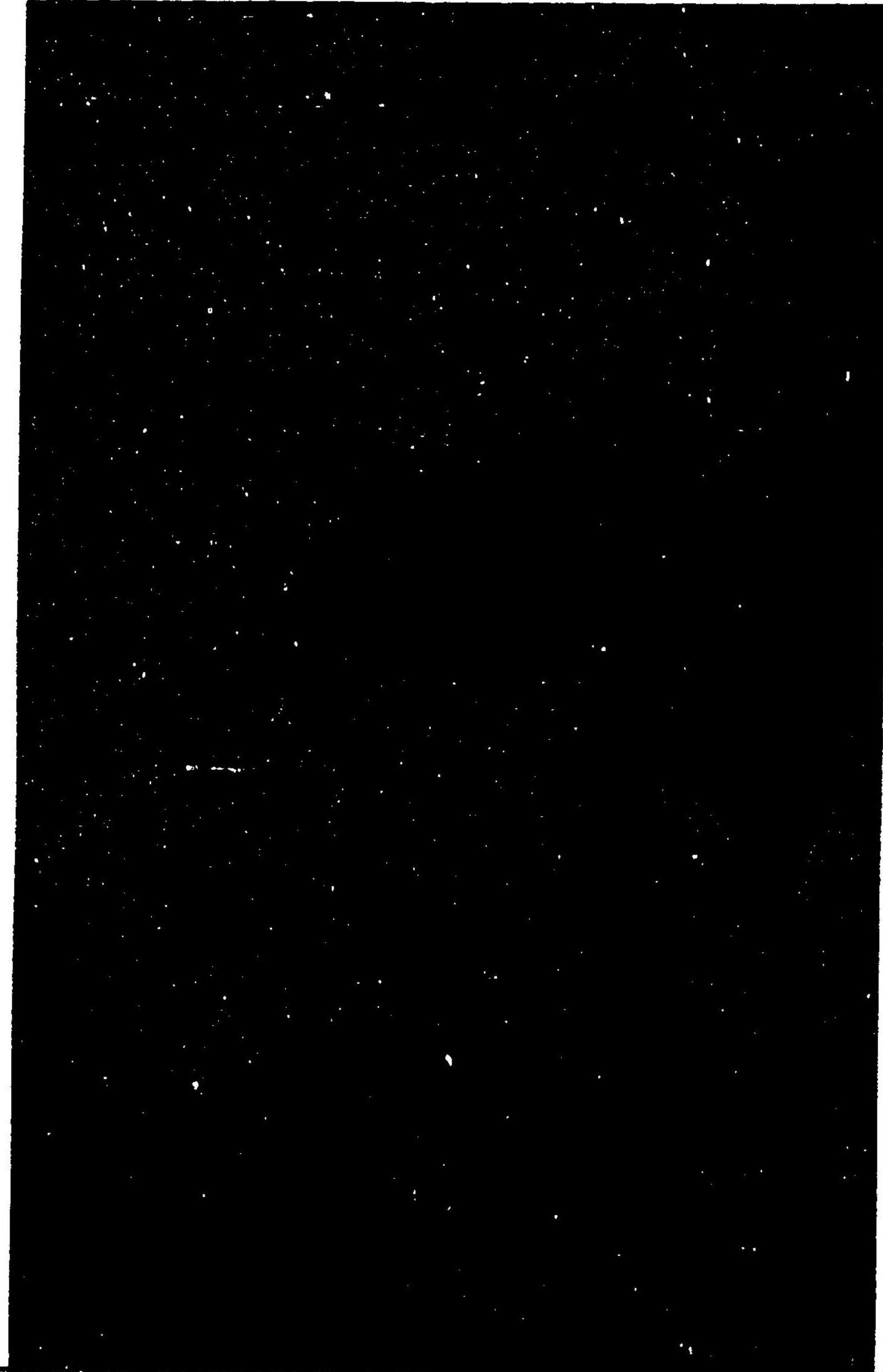
(竪五尺六寸八分、横五尺六寸)

京都嵯峨 大覺寺藏

此畫は始興の遺作中最も謹嚴精巧なるもの、一なり傳へ云ふ大覺寺の寛深大僧正嘗て其書院より四阿の田圃を望みたまへ、一農夫妻の睦じ氣に耕作に従事するを見、恰も其傍に侍りたる始興に命じて之を其杉戸に寫さしめたるものにして、爾後此畫に因み、其一室を唐輪の間と稱したりと(此書院今空し)看來れば一農夫牛を牽き、其婦鍬を持ち來りて重も氣に之を掻げ、夫之を顧みて何事をか語るの樣、筆端に發露し來て無限の情趣頗る掬すべきものあり、且つ耕牛また其眞を傳へ、鞍具與綱の如きも描寫悉く其微を盡せり、固より謹嚴の作始興平生の輕快飄逸なる筆致を見る能はずと雖も、而も人物の描法に至りては、一種春よべからざる始興の特調を示せり





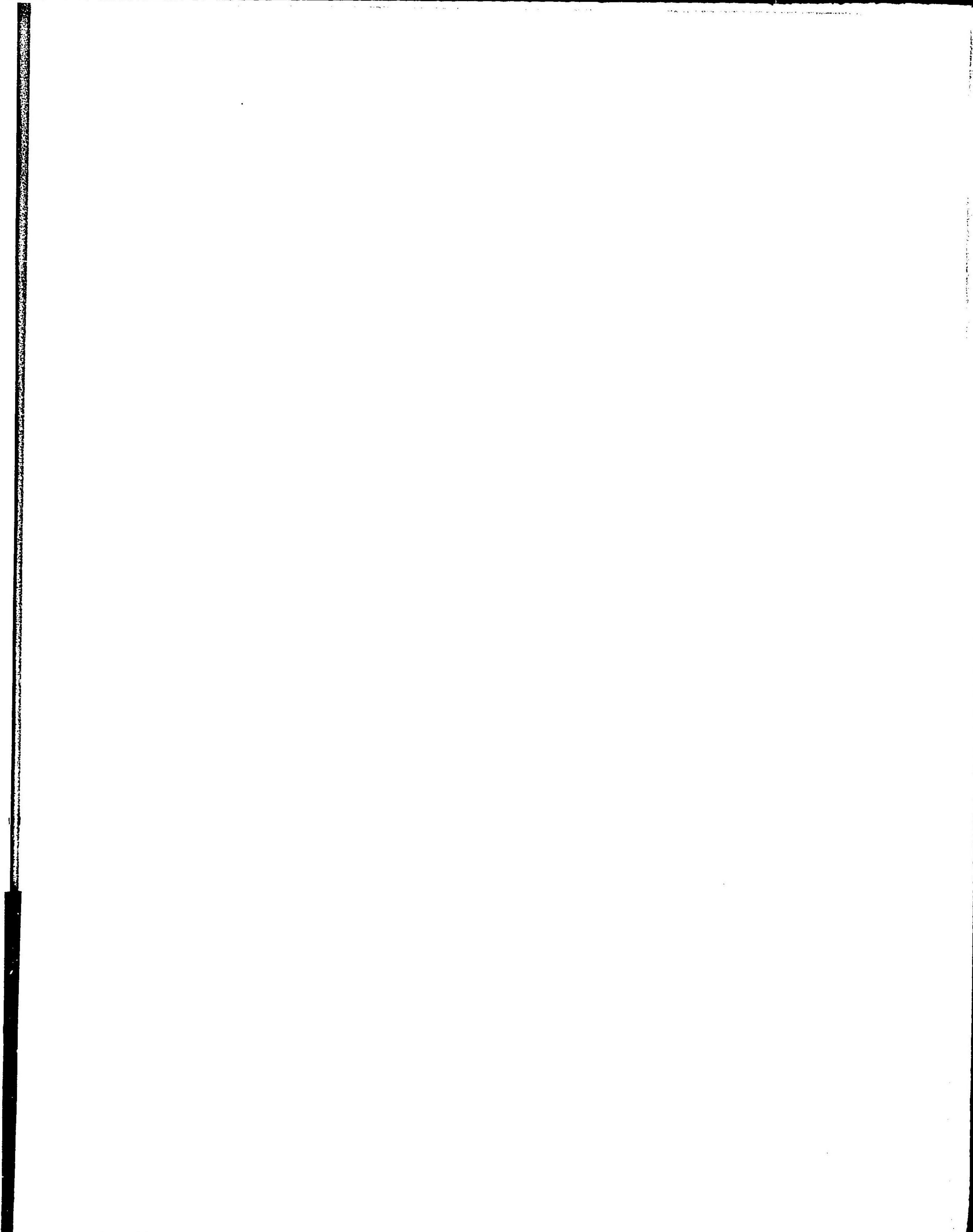










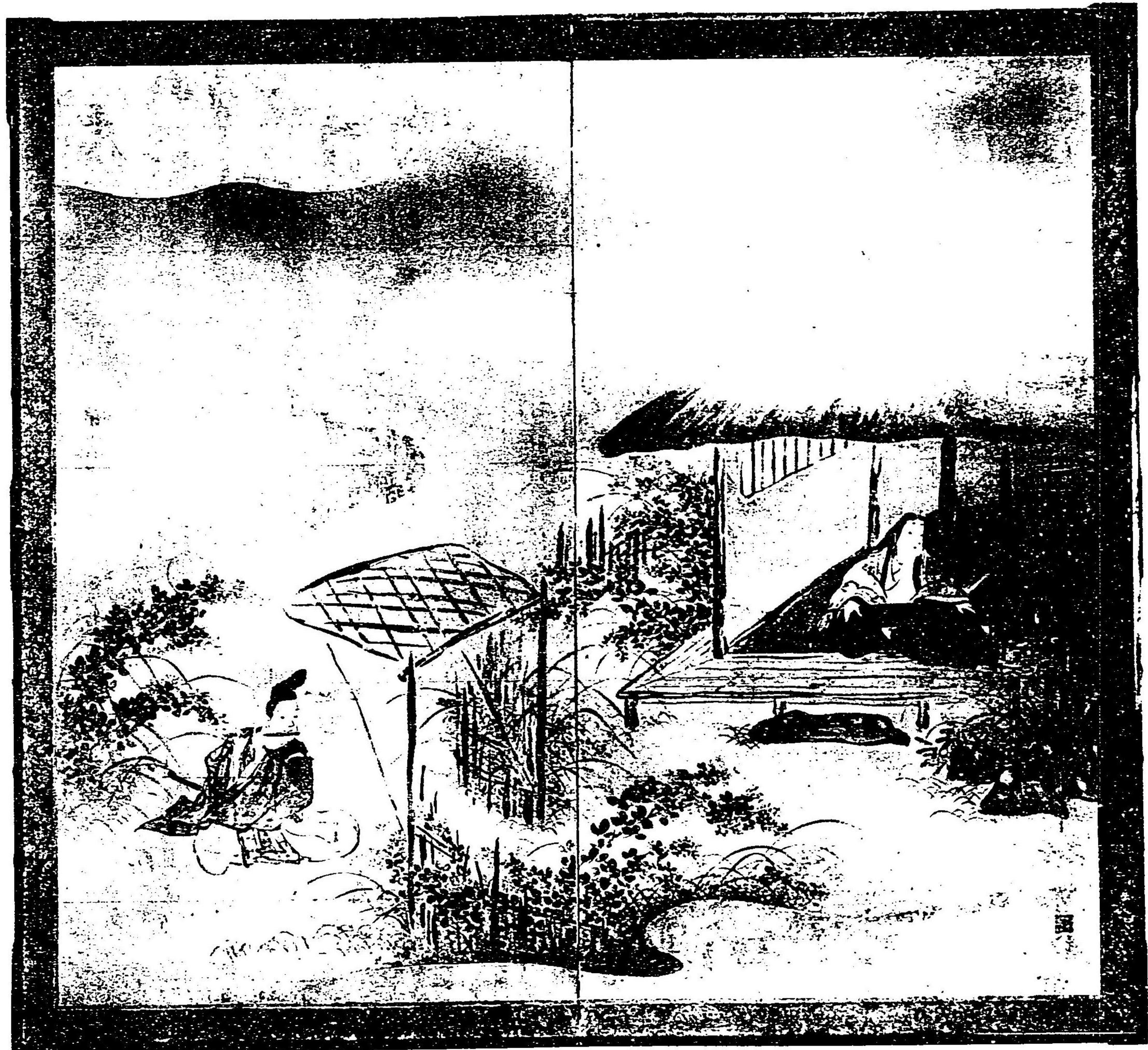


仲國尋小督圖二曲屏風(紙本着色)

(縦五尺一寸、横五尺七寸)

大阪上野理一君藏

本書は高倉天皇の寵姫なる小督局が故ありて和國平清盛に忌まれ、將に殺されんとするや、潛に宮を出でて嵯峨の民舎に匿れしかば、源仲國天皇の命を拜し、小督を嵯峨に尋ねし故事を圖したるものなり、筆致の秀麗にして賦彩の高雅なる殆んど光琳の風趣に迫まれるのみならず、明月燈々として中空に懸り、秋草離々として離落に滿つる處、美人茅屋に閒居して愁思を彈琴に遣るの時、仲國たま／＼尋ね到り、横笛を以て之に和し、以て至尊反側の意を傳ふるの情趣、躍々楮表に溢れて、無限の風和頗る掬すべきものあり、始興の作中殊に珍賞すべきものなるべし



立林何昂

立林何昂名は立徳何昂は其職また喜雨齋金牛道人等の別號あり其印文に往々文定又は太青の文字あるを見る蓋し文定は其字にして太青は其一別號ならんか家世々醫を業として加賀の前田侯に仕よ何昂故ありて亡命し江戸に來りて姓名を白井宗謙と改め下谷山谷等に住し乾山に就いて書を學ぶ後鎌倉に寓して鶴岡逸民又野夫と號し光琳三世の書家と稱せられ乾山に次いで寛延寶曆の間に世に名あり或は曰ふ何昂は光琳に學びて出藍の譽あり光琳の歿後盡く其印章を與へられ自作の書必ず之を簽せりと然れども光琳は京都に住し一たび江戸に下りたれども復た京都に還りて享保元年に歿し何昂は金澤より江戸に移りて京都に在りしことを聞かざるのみならず元文三年九月乾山が何昂に光琳の摹寫したる宗達の扇書卷を贈ると之に跋したる文に「右書本者同苗長江軒書々光琳撰俵屋宗達直筆令臨書處不可涉疑論者也爲後世之記之與親朋高醫立林立徳丈云爾」とあるを見ても光琳が何昂の師に非ざりしことを想像すべく又何昂が其書に用ゐたる光琳と同一の印は方祝の圓章の外之を見ず而も此印は乾山が何昂に與へたるものなりとの傳あり且つ何昂を光琳三世と云ふは乾山を傳燈二世に數へたること言ふを俟たざるが故に其乾山の弟子なりしこと明かなり生歿の年月は詳ならず





玉蜀黍牽牛花圖(絹本着色) 子爵福岡孝弟君藏  
 此畫は、玉蜀黍と牽牛花を主題とし、その背景には、遠くを飛ぶ鳥や、水辺に遊ぶ魚などが描かれている。画面の構成は、上段に玉蜀黍の穂が並び、下段に牽牛花の葉と花が描かれている。色彩は、玉蜀黍の黄色と牽牛花の赤色が主眼となっており、背景は淡く、主題を際立たせている。筆致は、写實的であり、細部まで丁寧に描かれている。

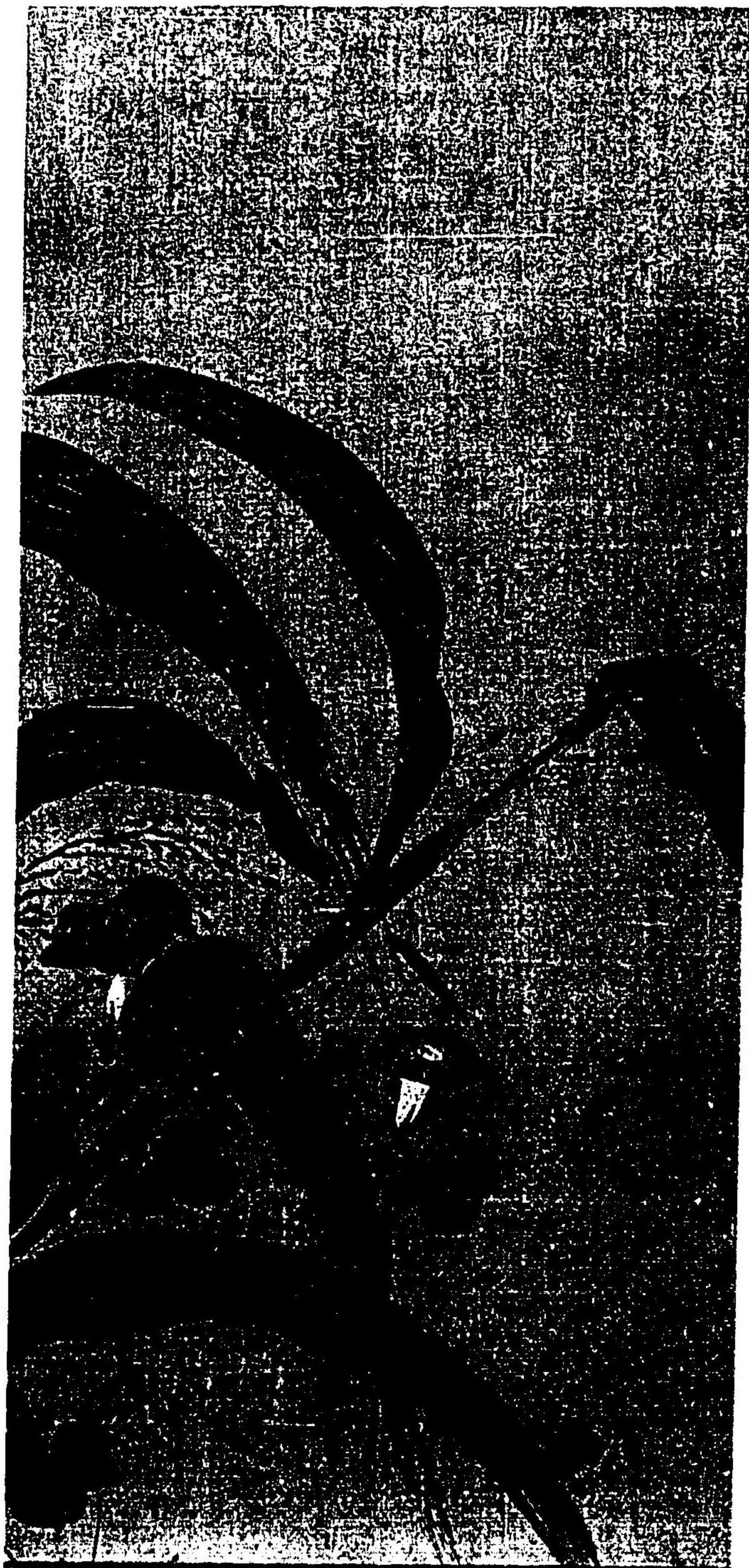
京林 阿彌

玉蜀黍牽牛花圖(絹本着色)

(幅二尺九寸四分、高一尺二寸)

子爵福岡孝弟君藏

何種の遺品を求めて本書に收むるに足るもの唯、僅に此一圖を得たり。是れ實に何種の名品なりと雖も、之を以て彼れが所作の全豹を評定すること頗る難し。然れども個人の趣味様式は其如何なる製作にも際約せられざることをなすが故に、此一圖また以て何種の面目を窺ふに足るべし。今之を精鑿するに其師承せる乾山の風格は却て差も認むべからずして、寧ろ大に宗達の遺韻を拘すべきものあり。素素の描法の如き殊に然りとす。牽牛花及び雜草の書法に至りては、瀟灑輕巧亦乾山の稚氣を傳へず。是れに由りて之を觀るに、何種は乾山の指導によりて學べりと雖も、其祖述せる所は、蓋し主として宗達に在りしものならんか。





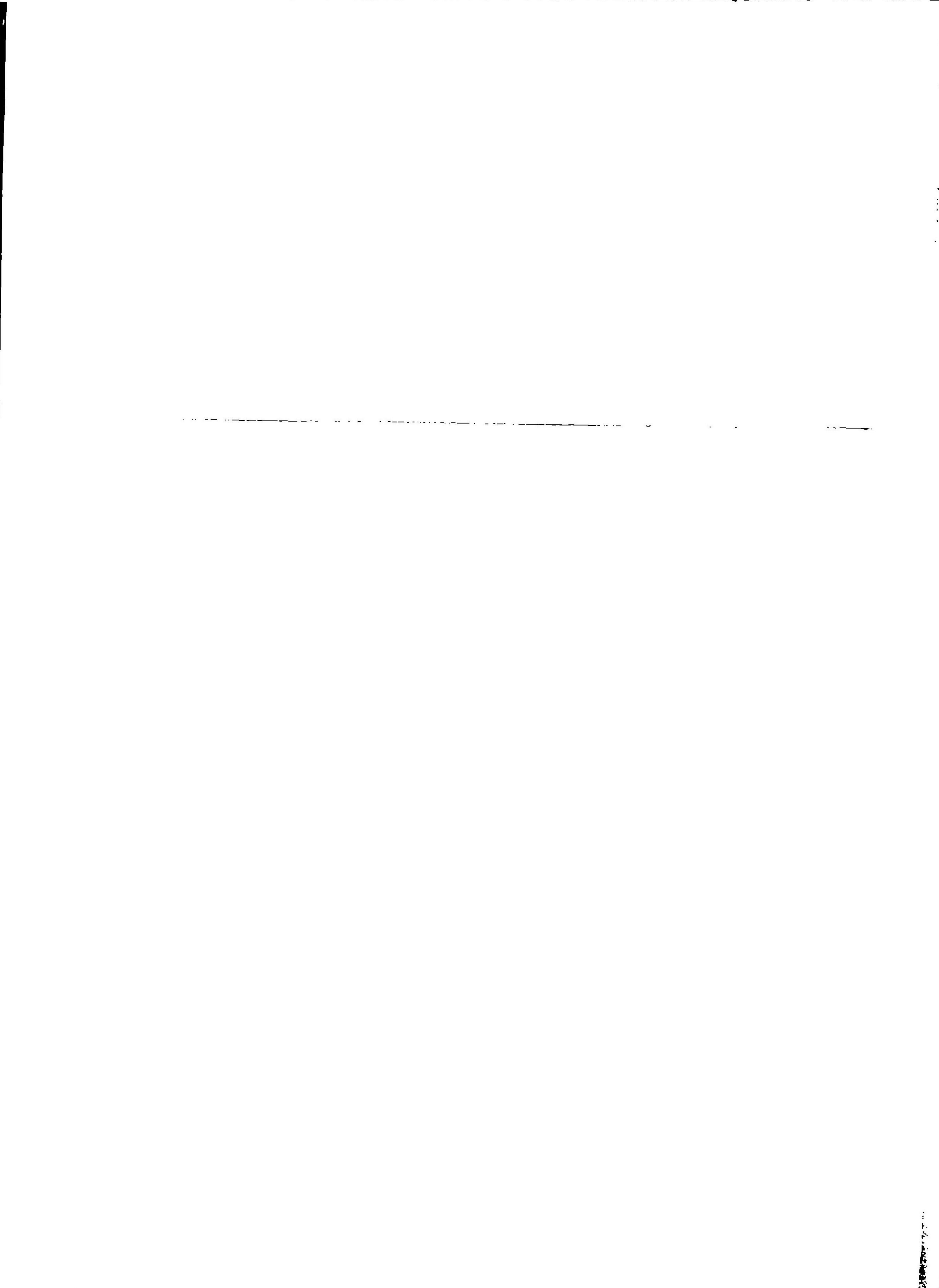
俵屋宗理

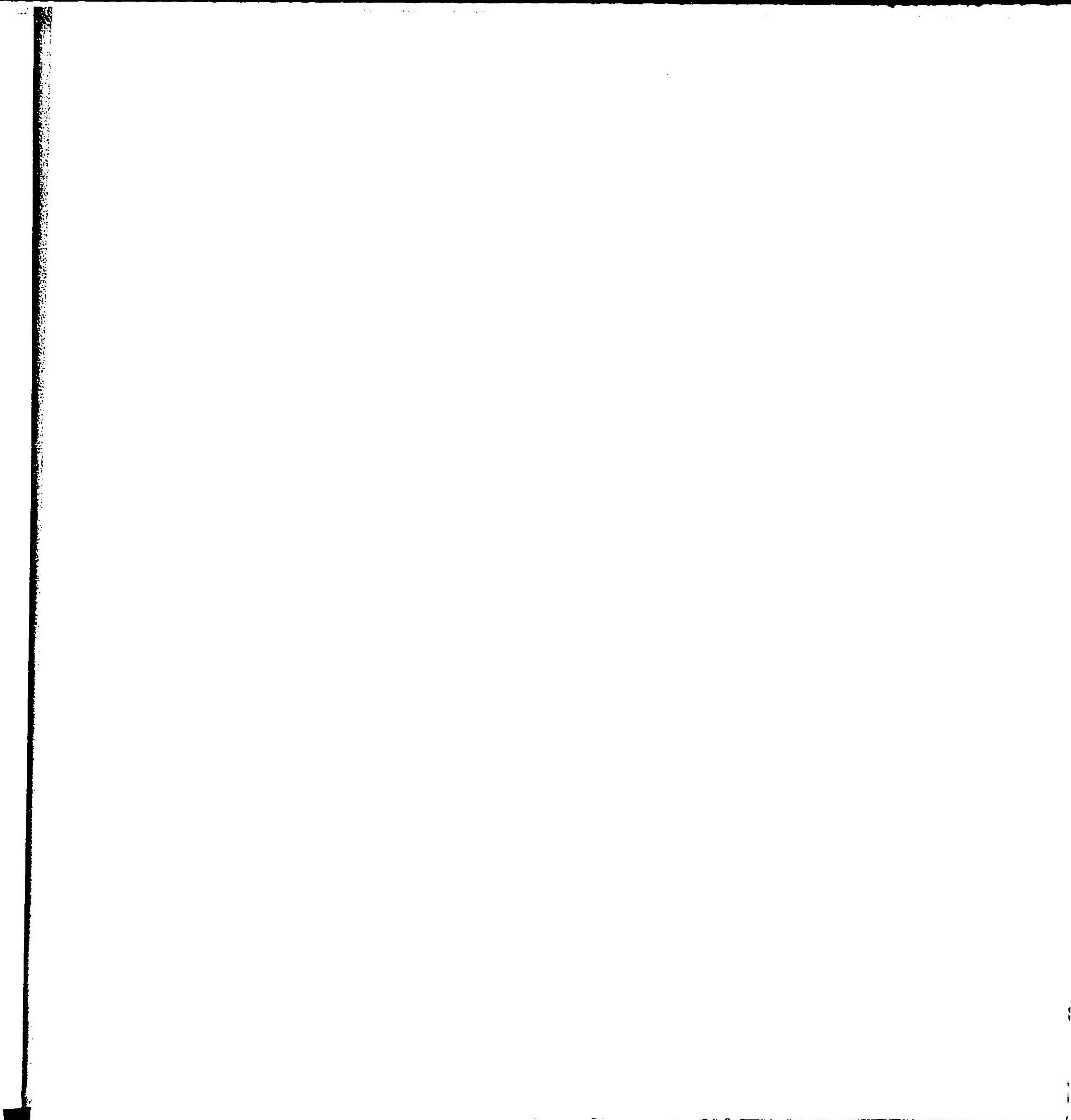
俵屋宗理元知と稱し庭植青々柳々居百琳又百琳竄琳一に隣に作る等の號あり明和安永頃の人なり初の住吉廣守寶永二年一安永六年に學び後専ら光琳の畫法に倣ひしと云ふ其遺作の優秀なるものは往々光琳の筆と誤り認めらる然れども俵屋は蓋し其本姓に非ずして恐らく宗達を慕ひて稱したるものならんか宗理の名の基く所亦當に然るを見る

倭屋宗理

倭屋宗理元知と稱し、庭栢、青々、柳々居、百琳、又百琳、齋琳一に隣に作る等の號あり、明和、安永頃の人なり、初め住吉廣守  
寶永二年—安永六年に學び、後専ら光琳の書法に倣ひしと云ふ、其遺作の優秀なるものは、往々光琳の筆と誤り認め  
らる、然れども倭屋は蓋し其本姓に非ずして、恐らく宗達を慕ひて稱したるものならんか、宗理の名の基く所亦當に  
然るを見る



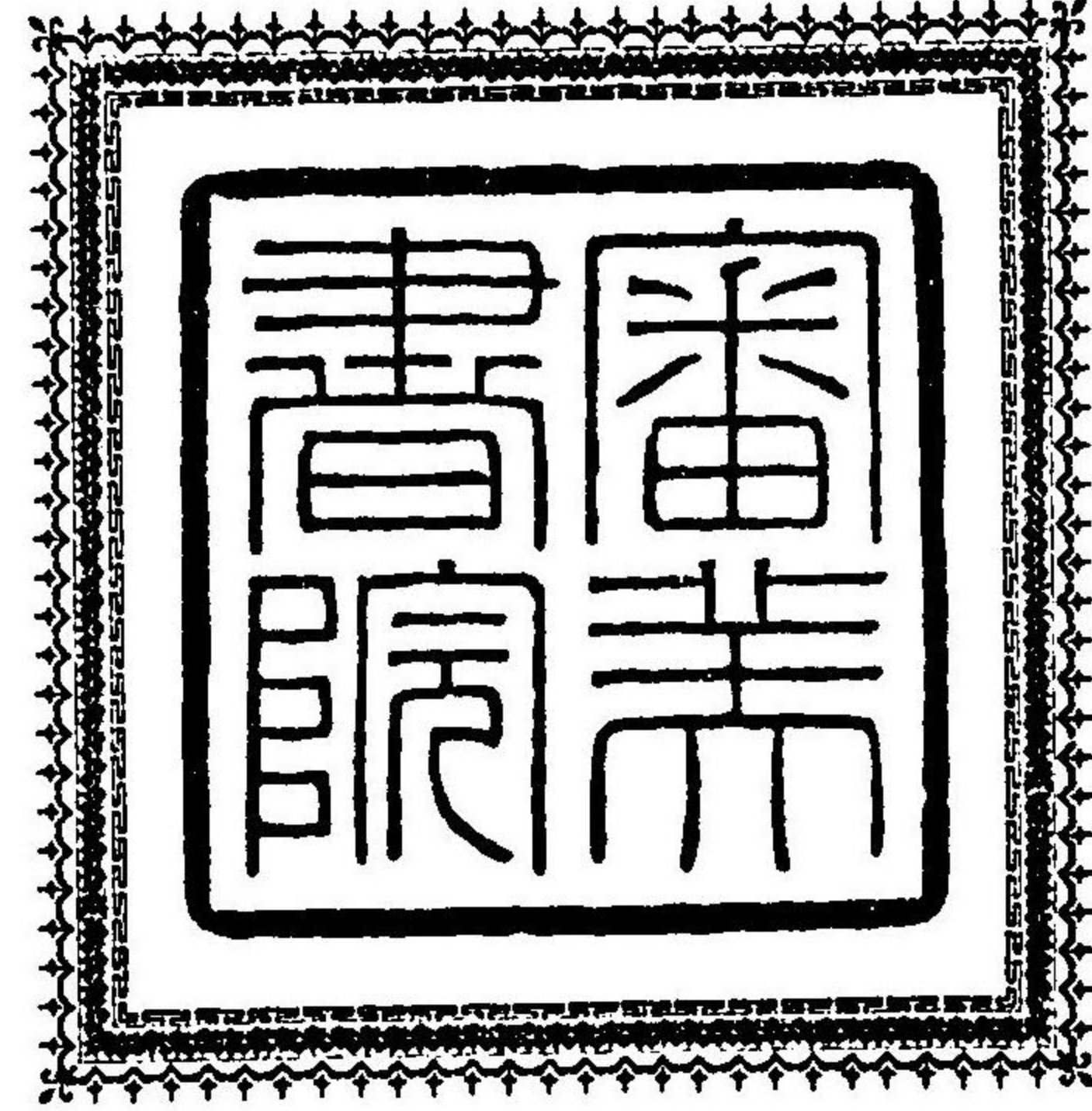






明治三十九年四月五日印刷  
明治三十九年四月十日發行

不許複製



發行所

編輯者 東京市京橋區新着町十三番地 田島志一

印刷者 東京市京橋區新着町十三番地 梶間春三

木版印刷所 東京市京橋區新着町十番地 審美書院木版部

寫真製版印刷所 東京市京橋區日吉町十三番地 小川寫真製版所

活版印刷所 東京市京橋區築地二丁目十七番地 東京築地活版製版所

東京市京橋區新着町十三番地

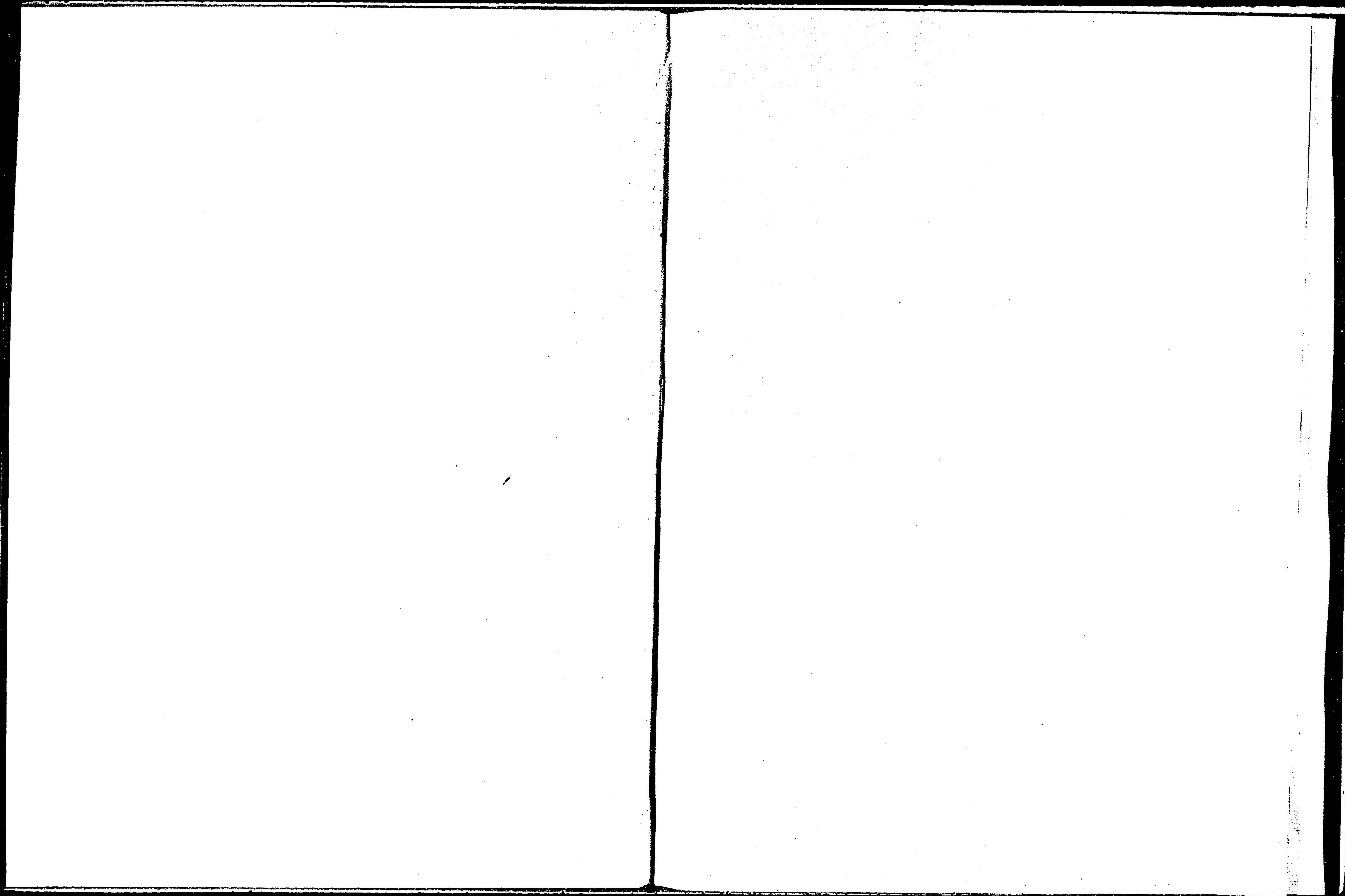
審美書院

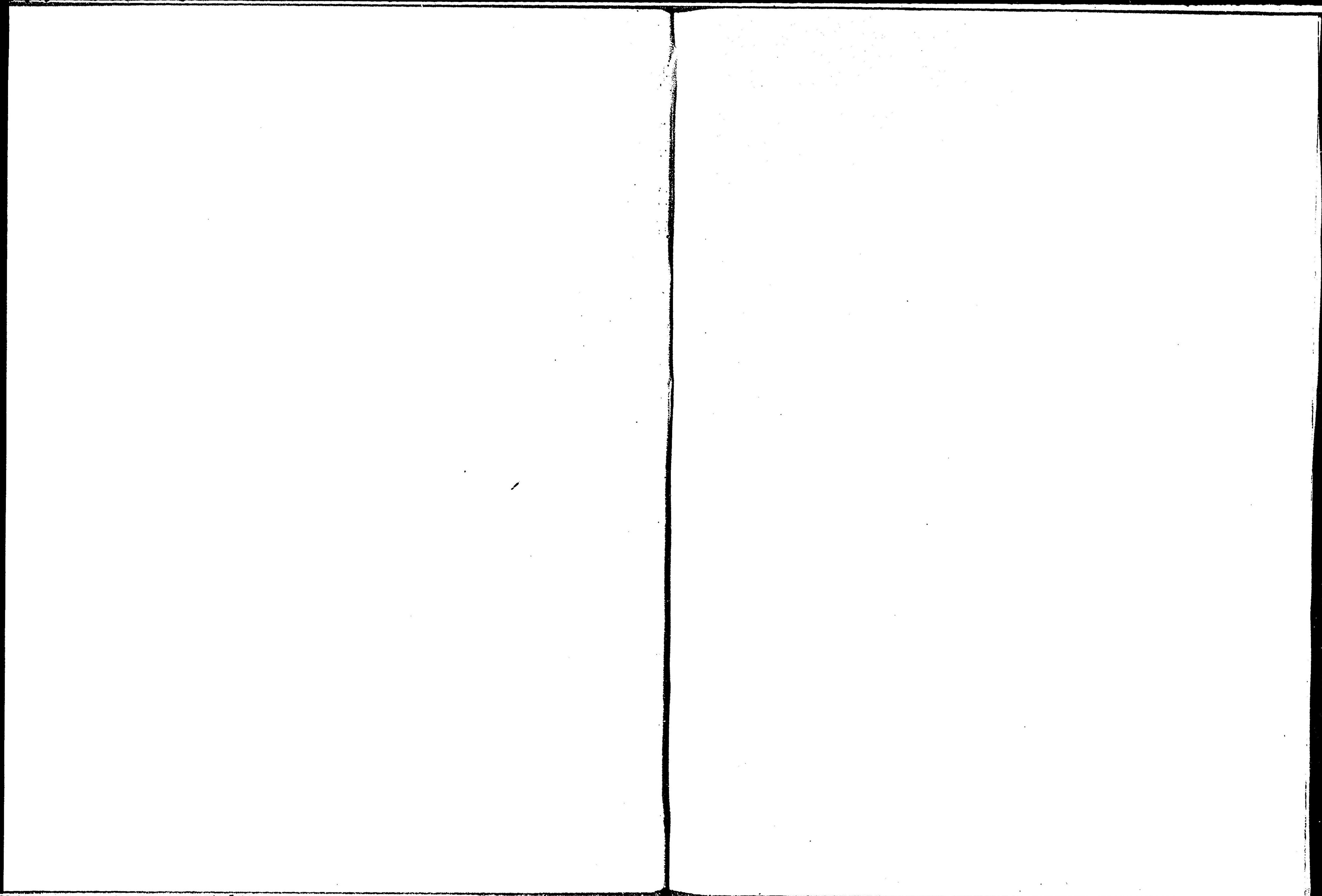
(電話 國新橋 三〇五五番)



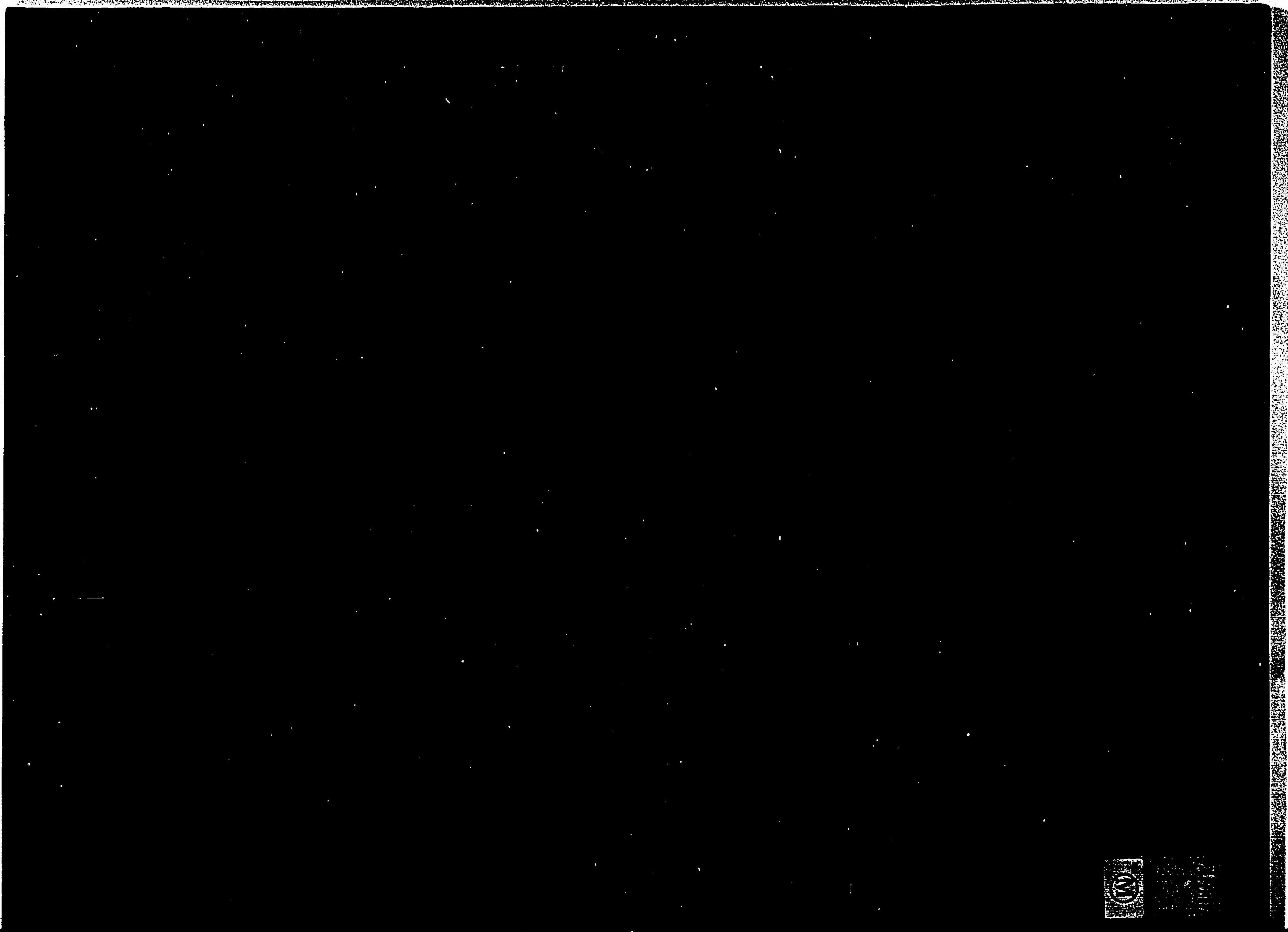
#27-14











3

